

一般国道 23 号中勢道路（10 工区）建設事業に伴う
蔵田遺跡（第 4 次）発掘調査報告

2008（平成 20）年 2 月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県津市は、平成18年の市町村合併により旧10市町村を合わせた広大な面積を持つことになりました。その中でも旧津市域は、新市の中核となるべき地域で、安濃川や岩田川といった河川によって育まれた沖積平野に多くの遺跡が眠っている地域であります。

今回報告します蔵田遺跡では、過去にも一般国道23号中勢道路の建設に先駆けて発掘調査が行われており、弥生時代・古墳時代の集落や自然流路、それに伴う護岸施設等が見つかっています。今回の調査も、中勢道路建設に先駆けて行ったもので、過去の調査区と連結する遺構等が見つかりました。

これらの埋蔵文化財は、記録保存というかたちになりましたが、調査によって判明した多くの成果は、津市域が古来より発展していた事実を伝えています。このような文化財が、現代に生きる人々、またこれから未来を背負う子供たちに広く認知・活用され、地域を考える材料になり、文化力豊かな魅力ある地域の創造に役立つことを切望する次第です。

最後に、調査にあたっては、国土交通省や津市教育委員会をはじめ、地元の方々から多大な御協力とともに温かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、心からの御礼を申し上げます。

2008年2月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、三重県津市納所町字蔵田に所在する蔵田遺跡(第4次)発掘調査にかかる報告書である。
- 2 本書が扱う発掘調査の原因事業は、一般国道23号中勢道路建設事業である。
- 3 本遺跡の調査は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局(当時。現国土交通省中部地方整備局)から委託を受け、平成11年度に実施した。調査費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。
- 4 発掘調査の体制は以下のとおりである。
調査主体：三重県教育委員会
調査担当：三重県埋蔵文化財センター
現場作業：社団法人中部建設協会
- 5 現地調査の担当は下記のとおりである。
三重県埋蔵文化財センター 調査第二課第三係
主事(津市教育委員会より派遣) 山口 格 調査補助員 小林俊之
- 6 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センターで実施し、調査研究Ⅱ課が中心に行った。遺構と遺物の写真撮影は山口が行った。報告文の執筆は、第Ⅴ章(自然科学分析)はパリノ・サーヴェイ株式会社がを行い、それ以外は小林が行い、全体の編集は小林が行った。また、執筆の分担は目次および文末にも記した。
- 7 室内での作成業務は市川嘉子、黒川敬子、太田浩子、森川絹代、三谷妙、蒔田やよい、新田智子、倉田由起子、北岡佳代子、山口香代、西山実公子が担当した。また、調査補助員として、西脇智広が整理作業に携わった。
- 8 現地の調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益な御教示を受けた。(敬称略)
青木哲哉(立命館大学)
- 9 蔵田遺跡(第4次)については、すでに『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅻ(三重県埋蔵文化財センター、2000年)に、その調査途中の概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。
- 10 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

I	前言	(小林)	1
1	中勢道路建設と埋蔵文化財保護		1
2	調査の体制		1
3	調査の経過		4
4	調査の方法		4
5	整理作業の方法		5
II	位置と環境	(小林)	6
1	地理的環境		6
2	蔵田遺跡の過去の調査成果		6
3	周辺の遺跡		6
III	層位と遺構	(小林)	10
1	基本層序		10
2	下層の遺構		10
3	弥生時代の遺構		13
4	古墳時代の遺構		17
5	時期不明の遺構		19
IV	出土遺物	(小林)	21
1	下層遺構の出土遺物		21
2	弥生時代の出土遺物		21
3	古墳時代の出土遺物		21
4	その他の出土遺物		22
5	包含層出土遺物		22
V	自然科学分析		33
1	分析の目的	(小林)	33
2	土壌分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社 齊藤紀行 金井慎司)	33
3	木材の樹種同定	(パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦)	34
VI	調査のまとめと考察	(小林)	38
1	確認された遺構		38
2	弥生時代集落の様相		38

挿 図 目 次

第1図	中勢道路(8・9・10工区)内遺跡位置図	2
第2図	調査区位置図	3
第3図	小地区(グリッド)設定図	3
第4図	蔵田遺跡遺構図、樽形礎実測図	7
第5図	蔵田遺跡周辺の遺跡	8
第6図	調査区土層断面図	11
第7図	下層確認坑土層断面図	11
第8図	遺構平面図、下層遺構略図	12
第9図	S R12・13、足跡群、S D41平面図	13
第10図	S K17・18・19平面図・断面図	14
第11図	S D4平面図・土層断面図、S Z11平面図・断面図	15
第12図	S D40平面図・土層断面図	16
第13図	S R1平面図・断面図	16
第14図	S R4平面図・土層断面図	18
第15図	S K20平面図・断面図	19
第16図	S K21平面図・断面図	19
第17図	出土遺物実測図①	24
第18図	出土遺物実測図②	25
第19図	出土遺物実測図③	26
第20図	出土遺物実測図④	27
第21図	出土遺物実測図⑤	28
第22図	試料採取位置図	33
第23図	弥生時代中期の蔵田遺跡・蔵田遺跡周辺微地形図	39

表 目 次

第1表	中勢道路(8~10工区)内遺跡調査経過表	3
第2表	蔵田遺跡第4次遺構一覧表	20
第3表	出土遺物観察表①	29
第4表	出土遺物観察表②	30
第5表	出土遺物観察表③	31
第6表	出土遺物観察表④	32
第7表	土壌理化学分析結果	34
第8表	樹種同定結果	35

写 真 図 版 目 次

1	調査区全景	43
2	S R14 [下層確認坑北壁土層] : 下層確認坑西壁土層	44
3	S R12・13、S D41全景 : 足跡検出状況 : 足跡検出状況 [拡大] : 足跡完掘状況	45
4	S K17遺物出土状況 : S K18遺物出土状況 : S K19遺物出土状況	46
5	S K18完掘状況 : S K19完掘状況	47
6	S D4土層断面 : S D4遺物出土状況 : S D40	48
7	S Z11 : S R1	49
8	S D11・S R4・S D4検出状況 : S D11・S R4・S D4完掘状況	50
9	S K20 : S K21	51
10	出土遺物 [土器]	52
11	出土遺物 [木製品]	53
12	樹種同定木材(1)	54
13	樹種同定木材(2)	55
14	樹種同定木材(3)	56

I 前 言

1 中勢道路建設と埋蔵文化財保護

昭和58年4月、都市計画道路中勢バイパスとして鈴鹿市北玉垣町から松阪市小津町(当時は一志郡三雲町小津)までの33.8kmの区間が都市計画道路に決定された。

この道路は、国道23号のバイパスで、中勢地域の道路網を充実させるとともに、総合的な地方都市交通体系の確立を図るためのもので、現国道23号の交通渋滞の緩和と周辺の適切な土地利用の誘導をめざし、地域の経済発展に寄与しようとするものである。

この中勢バイパス建設計画にかかる埋蔵文化財保護については、昭和57年1月に建設省(現国土交通省。以下同じ)から事業地内における埋蔵文化財の有無の照会を受け、三重県教育委員会が主体となり、関係する市町教育委員会の協力を得て分布調査を昭和58年度に行った。昭和59年5月に建設省へ分布調査結果を回答するとともに、建設省三重工事事務所、県道路建設課と今後の取り扱いについて協議を重ねた。その結果、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を行い、記録保存を行うこととなった。

調査は、建設省中部地方建設局から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会文化課が、平成元年度以降は三重県埋蔵文化財センターが調査を担当している。

また、現地作業については調査の円滑化を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。調査事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・社団法人中部建設協会の三者で昭和63年4月8日付け「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し事業を推進した。その後、事業計画の進展に合わせて、建設省中部地方建設局・三重県・社団法人中部建設協会の三者が平成3年10月31日付けで「変更協定書(第1回)」を、平成5年9月7日付けで「変更協定書(第2回)」を、平成10年3月31日付けで「変更協定書(第3回)」を締結し、道路建設事業との調整を図った。また、平成11年3月31日付けで、改めて6・8～10・13・14の各工区を対象とし

た「埋蔵文化財発掘調査協定書」(平成11年4月1日～平成16年3月31日)を締結し、平成11年度以降の事業を推進した。

さらに、平成16年3月31日付けで「変更協定書(第1回)」を、平成18年3月30日付けで「変更協定書(第2回)」を締結し、三者体制は終了し、平成18年4月3日付けで現地作業を含めた委託契約書が中部地方整備局と三重県で締結され、平成18年度以降の事業を推進している。

2 調査の体制

蔵田遺跡(第4次)調査は、調査主体は三重県教育委員会、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づく協定を締結して、津市教育委員会より派遣職員を得て調査体制を整えた。

現地の調査は平成11年度、報告書作成は平成11・15・19年度に行った。その体制は以下の通りである。(平成11年度)

主幹兼第二課長 吉水康夫
主査兼第三係長 本堂弘之
技 師 川畑由紀子
主 事 山口 格(津市教育委員会から派遣)
調査補助員 小林俊之
西脇智広(皇學館大學学生)
室内整理員 市川嘉子・黒川敬子・太田浩子・
森川絹代・三谷妙・蒔田やよい・
新田智子・倉田由起子

(平成15年度)

主幹兼調査研究Ⅱグループリーダー 新田 洋
主 幹 五嶋史佳
主 事 東 敬義・柴山圭子・福島伸孝
技 師 山中由紀子
臨時技術補助員 坂 佳彦
調査補助員 中西佳子
室内整理員 黒川敬子・太田浩子・森川絹代・



第1図 中勢道路(8・9・10工区)内遺跡位置図(1:50,000)

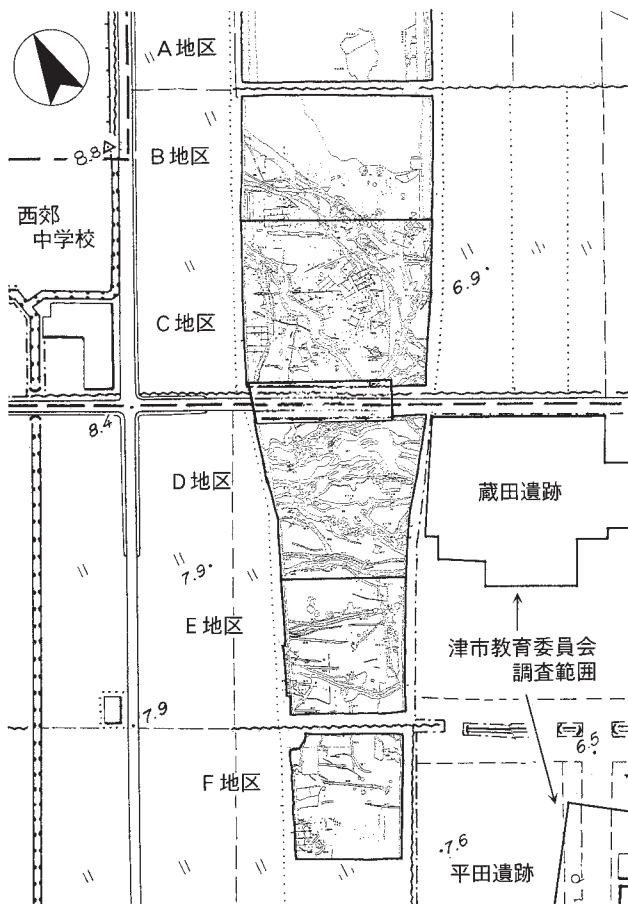
(国土地理院1:25,000棕本・白子・津西部・津東部より作成)

工区	遺跡名	調査対象面積		調査年度													
		範囲確認調査	本調査	昭和63	平成元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
8工区	18 丸土遺跡	128	—							範							
	19 山王遺跡	128	—							範							
	20 内垣内遺跡	128	—							範							
	21 天堤遺跡	55	—							範							
	22 河崎遺跡	256	—							範							
	23 六大A遺跡	448	13,220							範	8,830	4,130	260				
9工区	24 六大B遺跡	456	26,235	範		17,525	3,420	範	3,350	1,270	670						
	25 橋垣内遺跡	176	12,000	範	7,000	4,925	75										
	26 大古曾遺跡	680	12,435	範		範	5,160	範	240	7,035							
	27 新池2号墳	198	—										範				
	28 新池1号墳	20	—	範													
	29 西岡古墳	70	2,000					範	2,000								
	30 西岡2号墳	30	—					範									
	31 山籠遺跡	208	1,100	範	1,100												
	32 門脇北古墳	0	1,100		1,100												
	33 コウゼンジ遺跡	80	—	範													
	34 宮ノ前遺跡	144	2,800	範	2,700					100							
	35 森山東遺跡	240	5,230		1,000												
	36 太田遺跡	469	3,320														
	37 松ノ木遺跡	144	7,800	範	7,800												
65 長遺跡	0	3,700										3,700					
10工区	38 蔵田遺跡	1,356	16,340		範						5,600	範	6,810	3,300		630	
	39 位田遺跡	416	4,600		範								4,600			660	
	40 替田遺跡	432	[10,060]		範								範	6,620	3,140	300	
	41 式ノ坪遺跡	320	5,100		範									5,100			
	42 里前遺跡	256	1,280		範									範		1,280	
	66 梁瀬遺跡	1,152	3,620											範	範	3,620	
43 鎌切3号墳	—	—	昭和59年津市教育委員会が発掘調査														
範囲確認調査	30,517		2,249	1,680	300	461	324	1,047	96	748	1,024	678	2,010	0	8,560		
本調査合計		247,630	7,550	20,700	22,450	8,655	8,990	8,405	15,100	18,740	15,230	8,240	4,900	4,720	4,040		

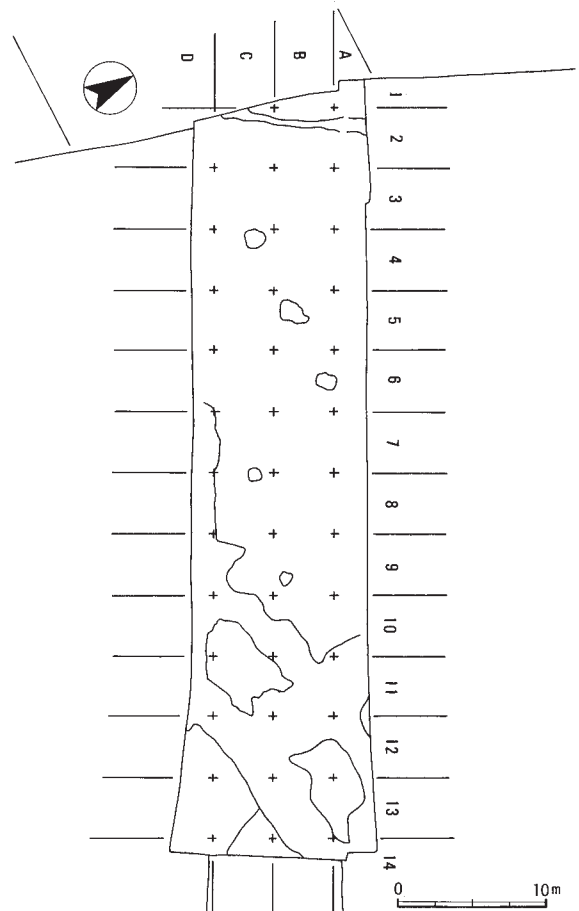
※下段の「範囲確認調査」「本調査合計」は全工区を合算した数字

※平成12年度位田遺跡は津市教育委員会が発掘調査

第1表 中勢道路(8~10工区)内遺跡調査経過表



第2図 調査区位置図(1:2,500)



第3図 小地区(グリッド)設定図(1:500)

蒔田やよい・宇河由起子・山口香代

(平成19年度)

調査研究Ⅱ課長 田村陽一

主 幹 上村安生

主 査 菌部英幸

主 事 浅尾 太・石井康晴

技 師 原田恵理子・水谷豊・角正芳浩・
野鷲美沙子

臨時技術補助員 才木薫・小林俊之

室内整理員 黒川敬子・太田浩子・森川絹代・

北岡佳代子・山口香代・

西山実公子・中西千鶴・

中村敬子・小倉靖子・浜崎佳代

10月26日 SK18・19遺物出土状況写真撮影。

10月27日～11月1日 雨天中止。

11月4日 調査区東部の遺構検出。

11月8日 調査区東部溝群(SR4等)の掘削開始。

11月10日 SK20完掘、写真撮影。

11月17日 遺構完掘。

11月18日 調査区全景写真撮影。

11月19日 1:20遺構平面図作成開始。

11月29日 SD41や足跡を検出。

11月30日 SD41や足跡の遺構掘削、写真撮影。

12月10日 下層確認坑掘削。

12月13日 現場作業終了。調査終了。

3 調査の経過

(1) 経過概要

今回の調査区は、すでに調査が終了したC地区とD地区の間に挟まれた市道部分である(第2図)。県教育委員会が中勢バイパス建設に伴って実施した発掘調査としては第4次調査であるが、平成3年度に「メッセウイングみえ」の駐車場建設に伴い、津市教育委員会が発掘調査を行っている^①。本書では便宜上、県教育委員会の第1～3次調査の報告書^②における呼称を用い、今回の調査は蔵田遺跡第4次調査と呼ぶ。現地調査期間は平成11年10月21日から同年12月13日、調査面積は630㎡である。

調査は、道路舗装や現代の耕作土については重機(バックホー)により除去し、遺物包含層の掘削ならびに遺構の検出・掘削については人力により行った。

(2) 日誌抄

調査の経過に関しては以下の通りである。

1999年

10月12日 表土掘削開始。

10月20日 地区杭(4mメッシュ)設定。

10月21日 遺構検出開始。

10月22日 調査区西壁土層図作成。SK17遺物出土状況写真撮影、出土状況図作成。

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる関係法令の諸通知は、以下により行っている。

- ・文化財保護法第98条の2第1項(文化庁長官あて)平成11年10月29日付け教理第317号(県教育長報告)
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(津警察署長あて)平成12年5月19日付け教理第8-25号(県教育長通知)

4 調査の方法

(1) 地区設定

調査にあたっては、調査区内に4m方眼で区切り、小地区(グリッド)を設定した(第3図)。それに西から東へ数字を、北から南へアルファベットを与え、各北西角を小地区(グリッド)名称とした。なお、蔵田遺跡の過去の調査でも小地区が設定されているが、今回の小地区はまったく任意のもので、一致しない。したがって旧国土座標や世界測地系とも一致しない。

(2) 遺構カード・遺構略測図

三重県では遺構カードを作成している。これは前述の小地区(グリッド)毎に作成するもので、遺構検出後、掘削するまでに記入し、遺構の重複関係、埋土の色調・状態などを明示している。また、この

遺構カードを基にして縮尺100分の1の略測図を作成した。

(3) 遺構番号

遺構番号については、調査時には、蔵田遺跡第1～3次で使用していた掘立柱建物、溝、土坑等遺構ごとの番号を踏襲し、1から付与した。本書では、同じく遺構ごとの番号であるが、第1～3次調査の番号に引き続いて通し番号を付与した。第1～3次調査と同一の遺構の場合には、同じ番号を与えた。柱穴については、前述の小地区毎の通し番号をつけることとした。

(4) 写真撮影

遺構の写真撮影は原則として4×5判を、補助的に6×9判・35ミリカメラを使用し、いずれもモノクロ・カラーポジを撮影した。使用したカメラは、WISTA4×5SP、Nikon FM2である。フィルムは、いずれの判でもKODAK T-MAX100、KODAK E100Sを使用した。

遺物の写真撮影は4×5判、6×9判(モノクロ)で撮影した。使用したカメラはTOYO VIEW GIIである。使用したフィルムはいずれの判でもKODAK T-MAX100である。

(5) 遺構実測

遺構実測図・土層断面図については縮尺20分の1の手書き実測を行った。遺構実測図の基準点は旧国土座標に基づいている。また各遺構の詳細な実測図が必要なものについては縮尺10分の1の手書き実測を行った。

5 整理作業の方法

調査で出土した土器類は調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄、乾燥、接合等の1次整理が行われている。1次整理作業後、遺物の選別作業を行い、遺物実測を行った。実測図が完成した遺物は、報告書作成のためのレイアウトを作成し、報告書番号順に遺物整理箱に保管している。遺物実測を行わなかったものは、出土遺構ごと、包含層等はグリッドごとにまとめ、遺物整理箱に番号を付し、保管・管理作業を進めている。

木製品については、調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄し、水漬けで保管し、実測が可能なものは実測を行った。写真撮影等を済ませた後、保存処理作業を進めた。

発掘調査に関する資料類は、図面(平面図・土層断面図など)、遺構カード、調査日誌、写真類などがある。また、整理段階で作成された遺物実測図、遺物写真などがある。これらは所定の番号を付け、当センターにて保管している。

また、自然科学分析結果についても、同様の記録類として保管している。

(小林俊之)

〔註〕

- ①津市教育委員会『三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報 蔵田遺跡 平田遺跡 位田東遺跡』(1993年)。
- ②三重県埋蔵文化財センター『蔵田遺跡発掘調査報告』(1999年)。

II 位置と環境

1 地理的環境

蔵田遺跡(1)は津市納所町蔵田ほかに所在する。伊勢平野中部を流れる安濃川によって形成された沖積平野の下流域左岸に位置し、標高は6.9~7.2m前後である。

周辺の地形を見ると、当遺跡周辺は微高地になっており、谷地形になる部分には自然流路等の遺構が検出されている^①。

2 蔵田遺跡の過去の調査成果

蔵田遺跡では、これまでに計4回(県3回、津市1回)の発掘調査が行われている^②。調査の結果からは、弥生時代から鎌倉時代までの遺跡であることが判明している。また、遺構はないものの、縄文土器も出土している。時期別に、簡単にまとめておく。

縄文時代 縄文土器は沖積堆積層から出土しており、中期から晩期までである。また遺構基盤層で灰褐色粗砂層が確認されており、晩期頃に基盤層が形成されてきたことが指摘されている。

弥生時代 方形周溝墓1基、土坑10基、溝5条、水田跡などが検出されている。

遺構は、方形周溝墓を中心とした地点の周囲に土坑が検出されている。また、津市教委調査区では、水田跡や旧河道内で良好な堰が出土している。これらの遺構は、中期前葉が大半のもので、中期末~後期初頭とできるものもある。なお、この時代の掘立柱建物跡が複数報告されているが、建物の時期決定が柱穴の出土遺物によるものでないため、再検討の必要がある。

土器では、SX1やSK1、SF1出土のものが、中期前葉の良好な一括資料である。

古墳時代 井戸1基、土坑5基、溝・自然流路等20条以上、掘立柱建物数棟などが検出されている。

遺構は中期~後期のものが多く、E地区でのみ前期の遺構・遺物が見つかっている。遺構のありかたや地形的なことを考えると、集落は調査区の西側に

広がっているものと考えられている。また、津市教委調査区では、流路内で良好な堰が検出されている。このほか、杭列等護岸施設と考えられる遺構が多数検出されており、注目される。

遺物では、良好な須恵器樽形甕のほか建築部材の出土が注目できる。

飛鳥・奈良時代 井戸1基、溝4条に加え、掘立柱建物数棟が検出されている。

遺構はE地区に集中し、調査区西部に建物があることから、調査区の西側に集落が広がるものと考えられている。

鎌倉時代 井戸2基、土坑1基、溝22条、掘立柱建物数棟がある。この中には平安時代末期とされたものも含んでいる。

遺構は、密度は低いものの、津市教委調査区も含めてほぼ全域に広がっている。これらの建物や溝は一定の方向を示すもので、安濃川流域に施行された条里地割の方向にほぼ合致する。特にSD29・36や津市教委調査区の溝1・2は、坪境溝と考えられ、非常に興味深い。

その他 上記の遺構のほかに、中世以降と考えられる牛の足跡、地震により液状化現象を起こして噴出した縄文時代晩期以降弥生時代中期以前の噴砂がある。

3 周辺の遺跡

ここでは、蔵田遺跡に関わる周辺の遺跡について見ていきたい。なお、蔵田遺跡周辺の遺跡については、これまで多くの報告書でさらに詳細に触れられてきているため、そちらを参照されたい^③。

縄文時代 蔵田遺跡のすぐ北にある松ノ木遺跡(37)では、晩期後半の流路跡と竪穴住居を確認している^④。また、納所遺跡(16)でも晩期後半の土器が出土している^⑤。

弥生時代 蔵田遺跡の東隣には、三重県を代表する弥生時代遺跡の納所遺跡がある。納所遺跡は前期から後期まで存続し、安濃川下流域の拠点集落

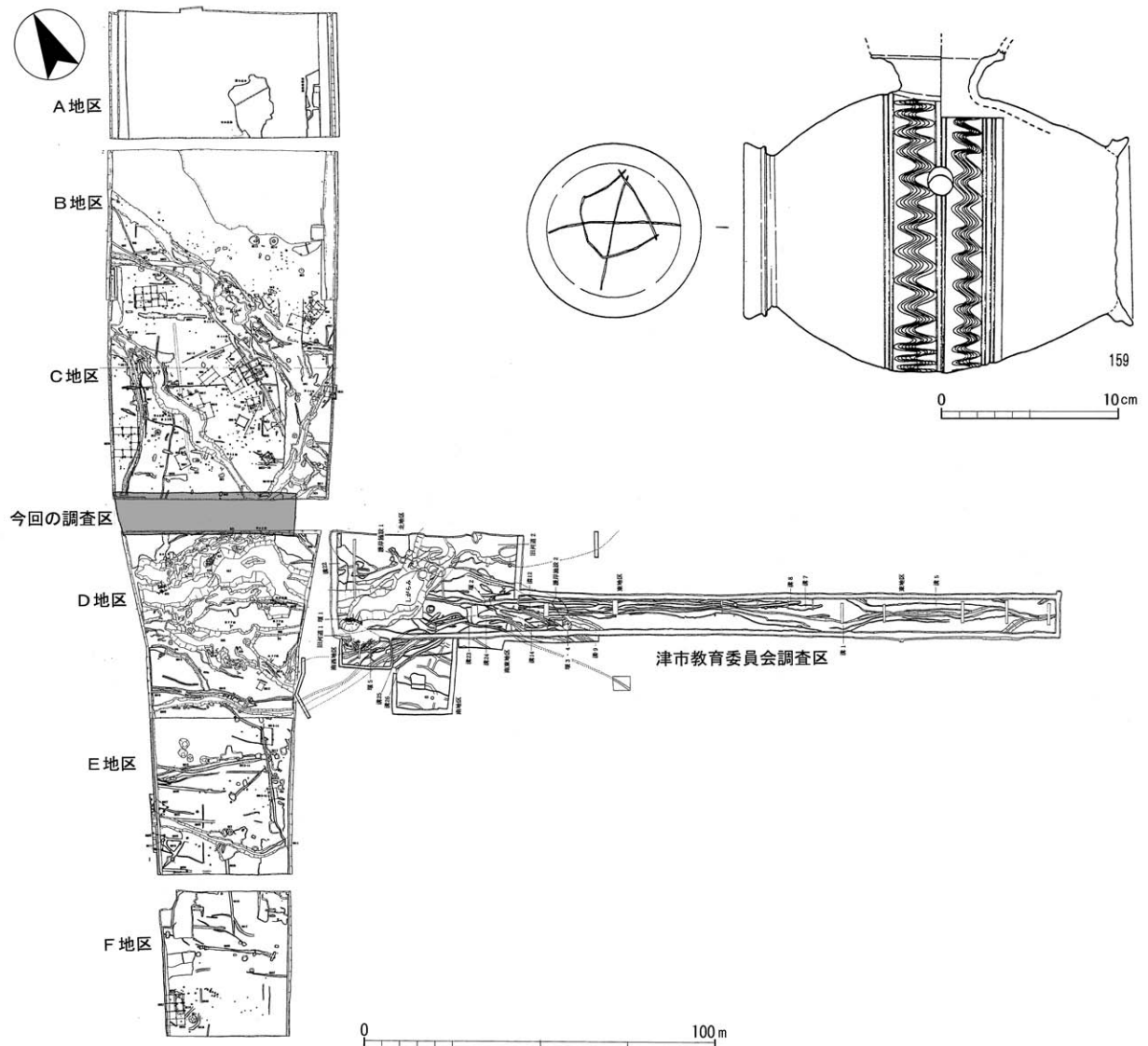
と認識されている。

半田丘陵裾部には前期の土器や木製品が出土した上村遺跡(10)が^㉑、見当山丘陵裾部には亀井遺跡(13)がある^㉒。中期には、蔵田遺跡のほか、安濃川沿いに替田遺跡(88)があり^㉓、丘陵上に大量の竪穴住居が検出された長遺跡(14)^㉔、山籠遺跡(82)^㉕がある。後期には、大城遺跡(73)^㉖、高松C遺跡(47)^㉗などがある。このほか水田跡が検出されている森山東遺跡(35)があり^㉘、安濃川流域には弥生文化が花開く状況が見られる。

墳墓では、倉谷遺跡(79)で中期中葉の台状墓^㉙、後期では高松弥生墳丘墓(19)^㉚など、丘陵上に墳丘

墓が築かれるようになる。

古墳時代 最古の古墳として坂本山6号墳(53)が挙げられる^㉛。ほか前期古墳として日野丘1号墳(7)が挙げられる。中期になると、5世紀の方墳である明合古墳(54)や全長90mの前方後円墳である池の谷古墳(55)などがあり、それぞれ安濃川の中流・下流での首長墳と言えるだろう。後期には、殿村1号墳(59)、鎌切3号墳(60)、岡南古墳(56)など全長30m級の前方後円墳が見られる。また、群集墳としては、長谷山古墳群(63)が有名で、県下有数の規模を持つ。その支群と言える平田古墳群(9)では発掘調査が行われている^㉜。



第4図 蔵田遺跡遺構図(1:2,000)、樽形甕実測図(1:4)



第5図 蔵田遺跡周辺の遺跡(1:50,000)〔国土地理院1:25,000縮本・白子・津西部・津東部より作成〕

集落では、中期の新畑遺跡(75)^⑧があるが、他には調査された遺跡数が少なく、不明なところが多い。**飛鳥・奈良時代** 飛鳥時代には、竪穴住居と掘立柱建物が検出された集落跡である宮ノ前遺跡(83)^⑨がある。ほか志登茂川沿いの橋垣内遺跡(25)^⑩、大古曾遺跡(81)^⑪で集落が、六大A遺跡(80)^⑫では蹄脚硯が出土している。

奈良時代には、橋垣内遺跡で掘立柱建物群がある。六大B遺跡(24)では平安時代の計画的に配置された建物群が確認されており、和銅開珎や緑釉陶器等の出土もある。これについては、平城宮出土木簡の中に表に「伊世国奄伎郡」、裏に「久善多里私部小口」と書かれるものがあり、それとの関連から地方官衙の可能性が指摘されている^⑬。

鎌倉時代 鎌倉時代には、いくつか集落等が見られ、蔵田遺跡のほか多数の遺跡で見られるようになる。また、里前遺跡(92)では、大量の未使用山茶碗の出土により安濃津(安濃津遺跡群・96)からあがった荷を再び集める集散地遺跡との評価が与えられている^⑭。

蔵田遺跡近辺では条里制についての検討も行われており、安濃川流域の条里制は、海岸線を基準にして北に対して約30度東に振っているとされる。蔵田遺跡等の発掘調査の結果、合致することが指摘されている^⑮。これら条里制については「民部田所勸注状」(四天王寺蔵)の古文書資料もある^⑯。

また、元徳元年(1329)の「安東郡専当沙汰文」^⑰には、「鳥加部」等の当該地の神田が記されており、蔵田遺跡の東方である納所町から北河路町一帯が伊勢神宮の神田になっていたことが考えられている。

(小林)

〔註〕

- ①三重県埋蔵文化財センター『蔵田遺跡発掘調査報告』(1999年)。
- ②津市教育委員会『三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報 蔵田遺跡 平田遺跡 位田東遺跡』(1993年)。
前掲①文献。
- ③蔵田遺跡のほか三重県埋蔵文化財センター『位田遺跡発掘調査報告』(1999年)や三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡(第5次～第8次)発掘調査報告』(2007年)など。
- ④三重県埋蔵文化財センター「松ノ木遺跡」(『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』、1993年)。
- ⑤三重県教育委員会『納所遺跡―遺構と遺物―』(1980年)。
- ⑥津市教育委員会『上村遺跡発掘調査報告』(1972年)。
- ⑦三重県教育委員会「亀井遺跡」(『昭和47年度県営圃場整備事業

地域埋蔵文化財発掘調査報告』、1973年)。

津市教育委員会『亀井遺跡発掘調査現地説明会資料』(2007年)。

⑧三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡(第5次～第8次)発掘調査報告』(2007年)。

三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡(第1・2次)発掘調査報告』(2008年)。

⑨三重県埋蔵文化財センター『長遺跡発掘調査報告』(2000年)。

⑩三重県埋蔵文化財センター「山籠遺跡」(『大古曾遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』、1995年)。

⑪安濃町教育委員会『大城遺跡発掘調査報告』(1998年)。

⑫津市埋蔵文化財センター「高松C遺跡発掘調査報告」(『津市埋蔵文化財センター年報』3、1999年)。

⑬三重県埋蔵文化財センター「森山東遺跡」(『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』、1993年)。

⑭安濃町教育委員会『大塚西山A遺跡／倉谷方形台状墓発掘調査報告』(2001年)。

⑮津市文化財保護協会『高松弥生墳丘墓発掘調査報告』(1970年)。

⑯津市教育委員会『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』(1970年)。

⑰安濃町遺跡調査会『平田古墳群』(1987年)。

⑱津市教育委員会『新畑遺跡発掘調査報告』(1973年)。

⑲三重県埋蔵文化財センター「宮ノ前遺跡」(『大古曾遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』、1995年)。

⑳三重県埋蔵文化財センター『橋垣内遺跡発掘調査報告』(1997年)。

㉑三重県埋蔵文化財センター「大古曾遺跡」(『大古曾遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』、1995年)。

㉒三重県埋蔵文化財センター『六大A遺跡発掘調査報告』(2003年)。

㉓三重県埋蔵文化財センター『六大B遺跡(B～I地区)発掘調査報告』(2006年)。

㉔三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』(2002年)。
三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡(第2次)発掘調査報告』(2005年)。

㉕前掲①文献など。

㉖津市四天王寺文書『平安遺文』第980号。

㉗群書類従第22巻。

Ⅲ 層位と遺構

1 基本層序

発掘調査区は、第2次調査のC地区とD地区の間であるため、調査区の北端と南端は過去の各々の調査区と重複している。したがって、層序を確認できるのは調査区の東壁と西壁の2断面しかない。

東西壁ともに調査前の舗装路面の下には、現代耕作土がある。東壁では、耕作土直下にて遺構が見られたため、ここで検出面とした。西壁では、灰色系のシルト質な土を除去した後に暗黄灰色粘土が見られ、そこに遺構が見られたため、ここを検出面とした。なお、西壁断面ではSR1は表現されていなかった。

2 下層の遺構

(1) SD4・11、SR4の下層流路群

SD4・11、SR4の下層で遺構が認められたため、調査区南東部のC・D12～13区のみ掘り下げて、流路群と足跡群を検出した。このうち、SD41は時期が異なるため、後述する。

SR12 C・D12区で検出した流路跡である。後述するSD11の南側で、SD11に並行して流れる。南側の肩を検出したにとどまるため、幅は2m以上しかわからない。北側の肩はSD11あるいはSD4によって消滅したと考えられる。重複関係から後述のSR13に後行する。

出土遺物はなく、時期は不明である。

SR13 C・D12区で検出した流路跡である。SD11の下層で検出したもので、灰色の砂礫層を埋土とする。遺構の東端を検出したにとどまるため、規模は不明である。おそらく、第1～3次調査の報告書中で触れられている灰褐色粗砂層に相当するものであろう^①。

足跡群 C・D12～13区でSR12の肩に添う形で検出した。東西7.0m以上、南北3.0mの範囲に広がっている。大半のものが縦5cm、横2cmの楕円形を対であるもので、V字形にするものもある。足先が

二股にわかれる爪を持つ動物のものと考えられる。

なお、この足跡検出面では古墳時代の遺物が出土したとされるが、SD41が断面観察の結果、表土直下からの掘り込みが確認されているため、検出時にSD41の埋土中遺物が混入したと考えられる。したがって、足跡群はSR12・13の流路群と同一もしくは近い時期のものと考えられる。

(2) 下層確認坑の埋没流路群

下層確認坑の設定 本調査では、後述する一連の遺構を調査した後(調査の最終段階)で、第8図の破線の範囲で下層確認を行った。

調査の主な目的は、(1)第2遺構検出面の有無、(2)下層の沖積土壌に包含される遺物の時期幅の確認、(3)沖積層の厚さの確認、である。調査は青木哲哉氏(立命館大学)による地理学的調査と併せて行い、遺跡の立地する沖積土壌の形成過程や遺跡の景観変化の検討に有益な指導と教示を得た。

調査の方法は、調査区中央部に東西10m、南北10mの確認坑を設定し、バックホーによる掘削を行った。土質が極めて軟弱であるため、壁面勾配は45°とした。なお、確認坑東側がバックホーの作業スペースとなったため、東壁は土層の記録をとることはできなかった。

遺構検出面より1m余り下で大量の湧水が始まり、これより下の掘削作業は不可能となった。確認坑壁面の観察の結果、3本の埋没流路(SR14・15・16)を確認した。

SR14 下層確認坑北・東・南壁にて確認された。全体的な規模は不明だが、土層図(第7図)中の1～8の灰褐色や褐灰色系の細砂質シルト～シルト質細砂を埋土とする。流下方向は、遺構底の高さから北から南方向と考えられる。

出土遺物には、杭先と思われる木製品や板状の木製品がある。しかし、土器の出土はなく、年代は不明である。後述するSK17等の弥生時代の土坑以前と言うことはできる。

SR15 下層確認坑南壁にて確認された。重複

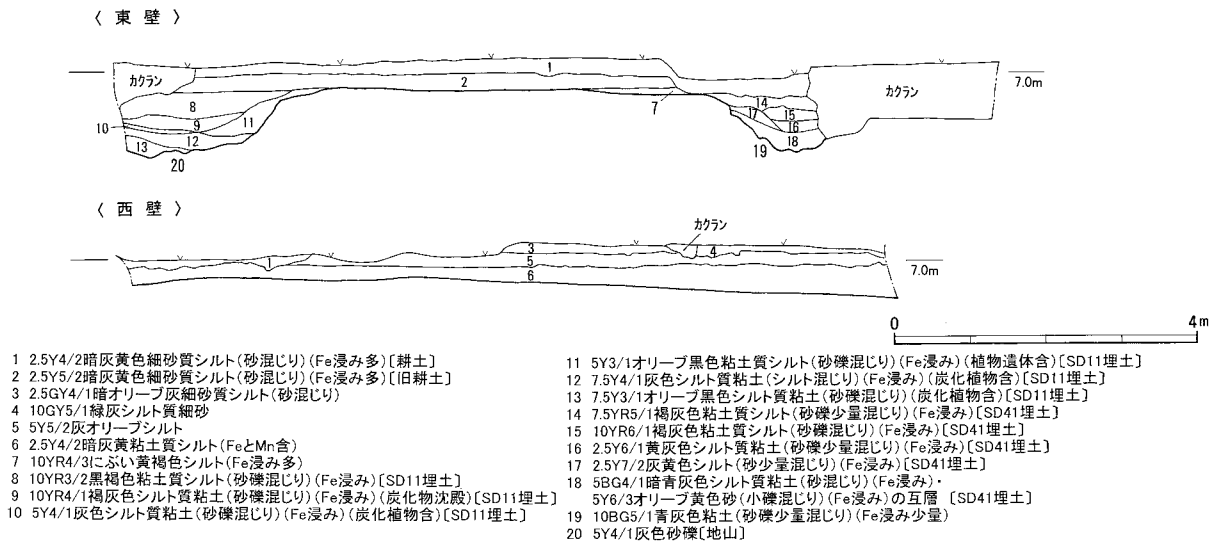
関係からSR14に先行する。これも全体的な規模は不明だが、暗灰色～灰褐色のシルト質中細砂～シルト質細砂を埋土とする。流下方向は、遺構底の高さから南南西から北東方向と考えられる。

出土遺物はなく、時期不明である。重複関係からSR14以前とは言うことはできる。

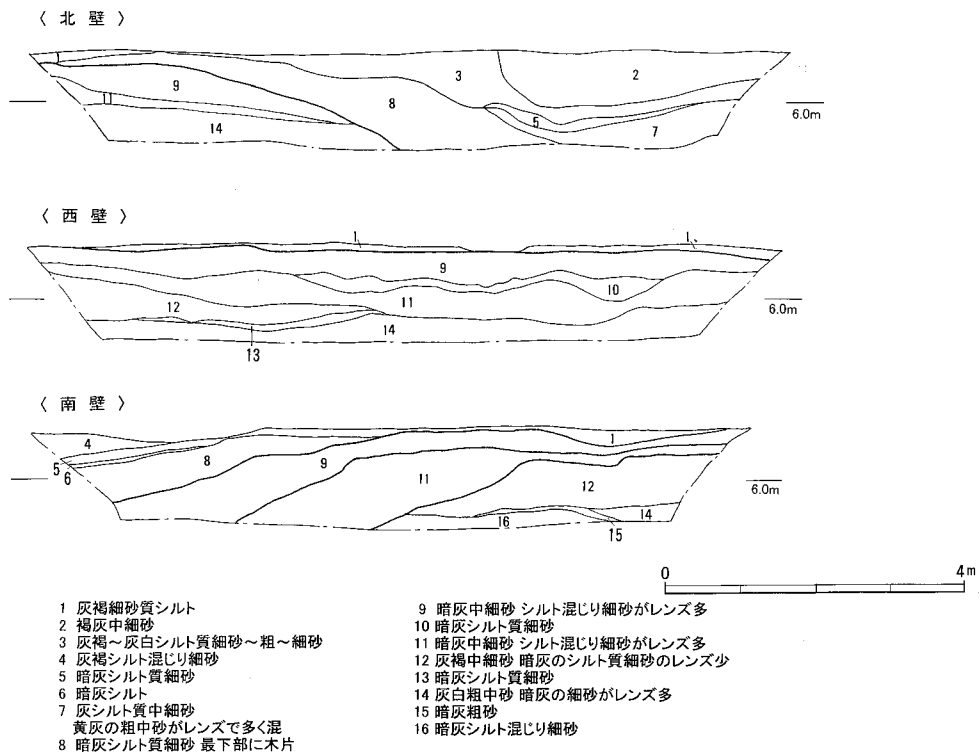
SR16 下層確認坑南壁にて確認された。重複

関係からSR15に先行する。これも全体的な規模は不明だが、暗灰色シルト質細砂を埋土とする。流下方向は、遺構底の高さから南南西から北東方向と考えられる。

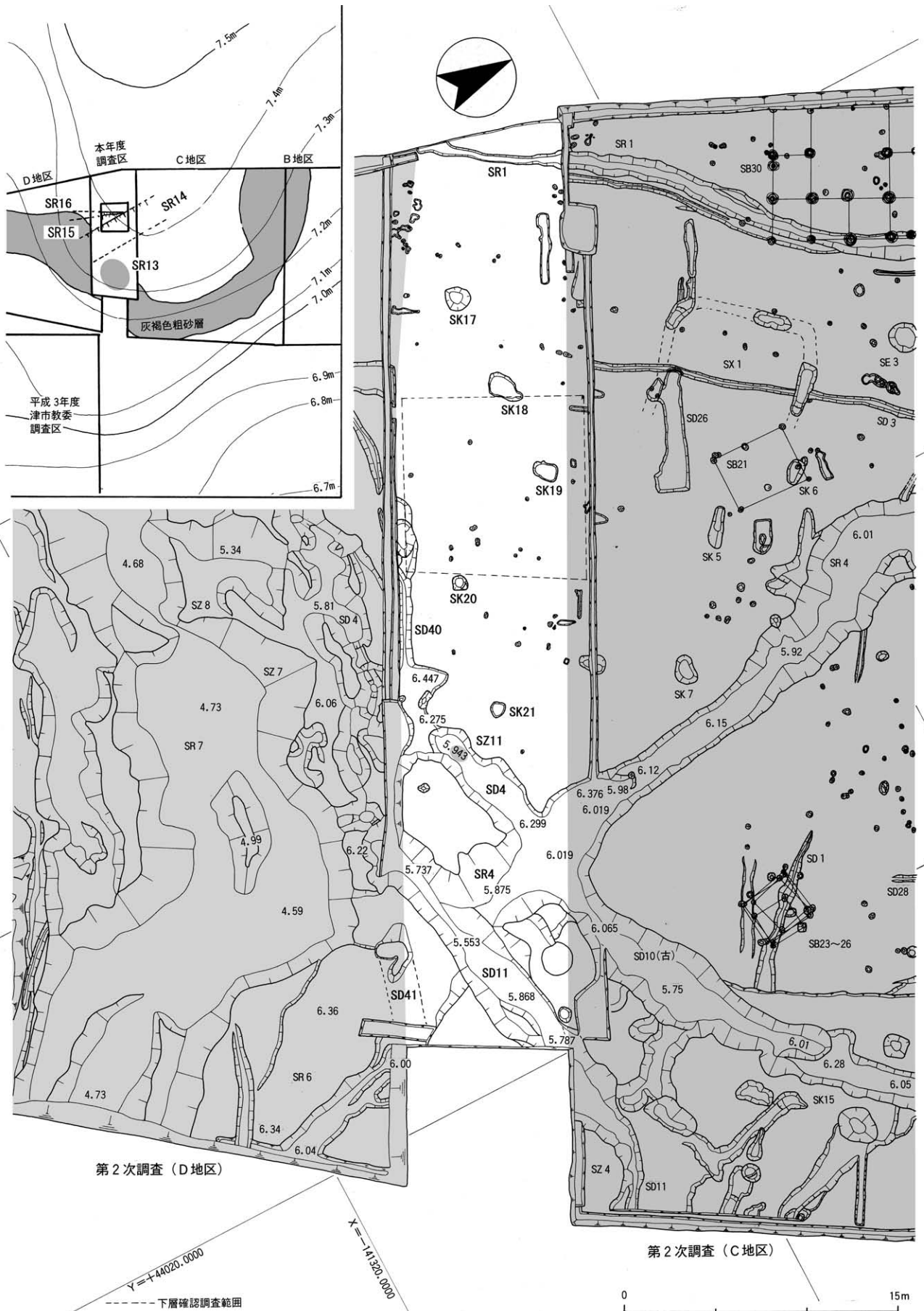
出土遺物はなく、時期不明である。重複関係からSR14・15以前とは言うことはできる。



第6図 調査区土層断面図(1:100)



第7図 下層確認坑土層断面図(1:100)



第8図 遺構平面図(1:300)、下層遺構略図(1:2,000)

3 弥生時代の遺構

(1) 土坑

S K 17 調査区西部のC4区で検出した。検出した規模は東西0.75m、南北0.6m、深さ0.1mのみだが、本来はさらに上からの切り込みがあったと考えられ、推定径1.4m、推定深さ0.5mほどの土坑であったと考えられる。

検出時には、弥生土器甕や壺の破片が出土している。土器は底面には接地していなく、何らかの廃棄土坑と考えるのが妥当であろう。また、削平を受けていることも窺える。

時期は、出土遺物から弥生時代中期前葉か中葉と考えられる²⁾。

S K 18 調査区中央部のB5区で検出した。東西2.1m、南北1.2mの不定形な楕円形で、深さは0.1mである。

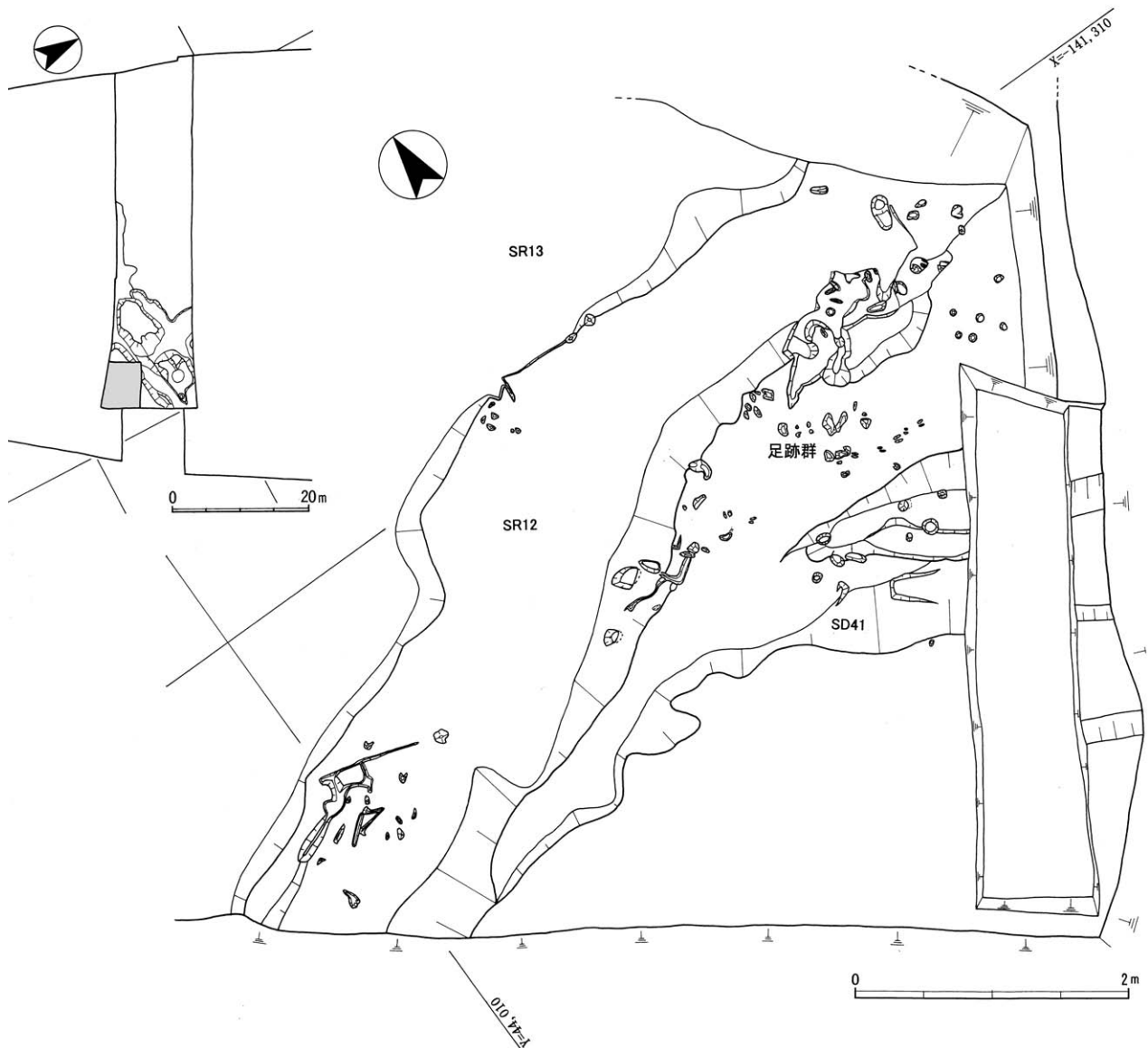
検出時には、弥生土器が多数出土している。これらはほとんどが破片になり、散乱しているため、S K 17同様に削平を受けていると考えられる。

なお、調査時には土壙墓の可能性も考えて、土壌サンプルを採取し、土壌分析を行ったが、積極的に墓とする資料は得られなかった(第V章参照)。

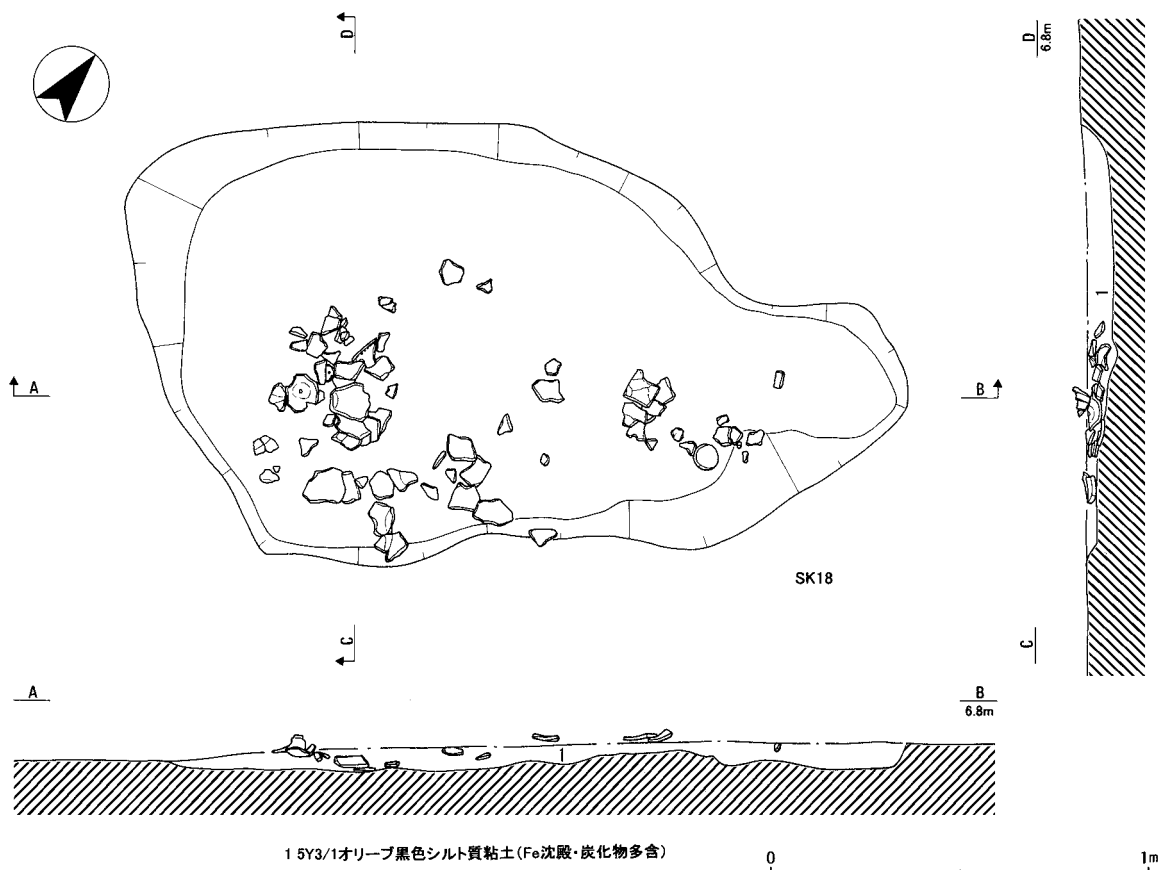
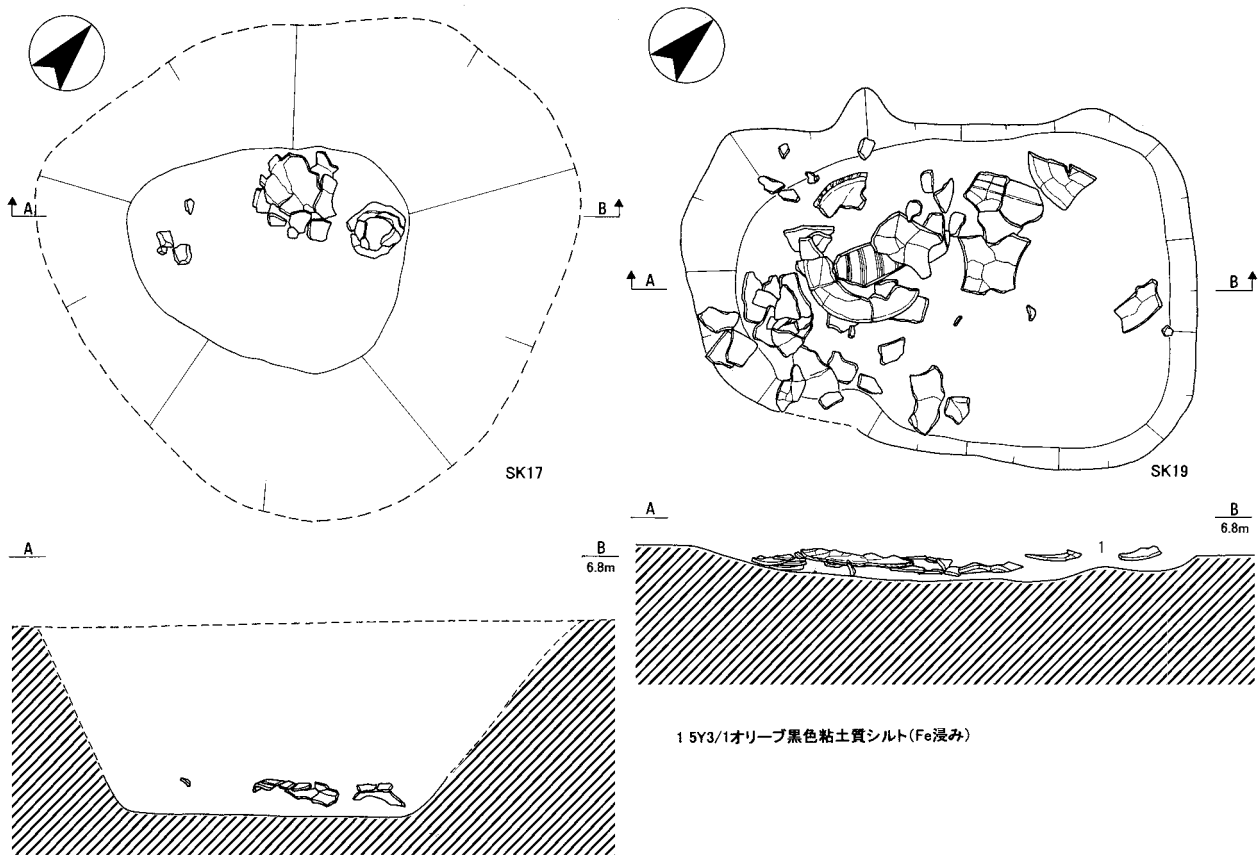
出土遺物には甕が多く、甕を置いておくような施設であった可能性もある。

時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

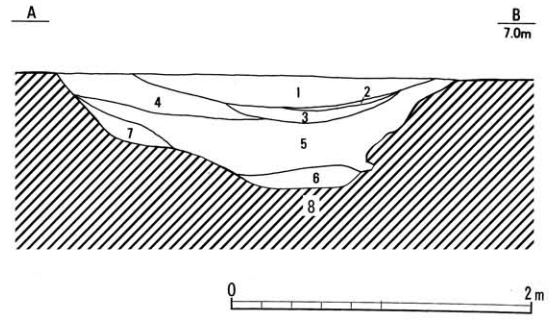
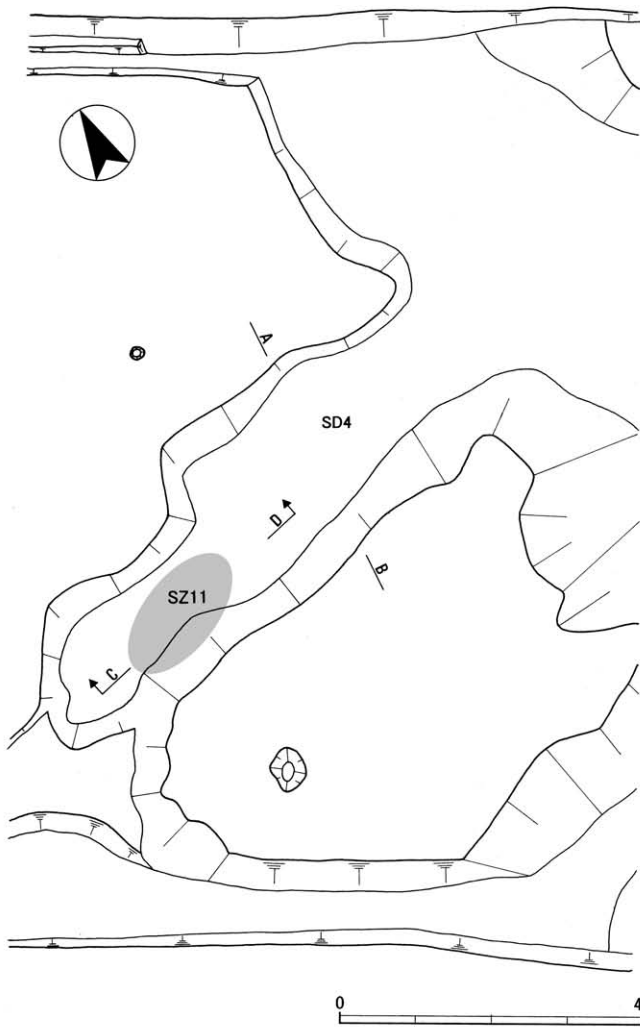
S K 19 調査区中央部のA・B6区にて検出し



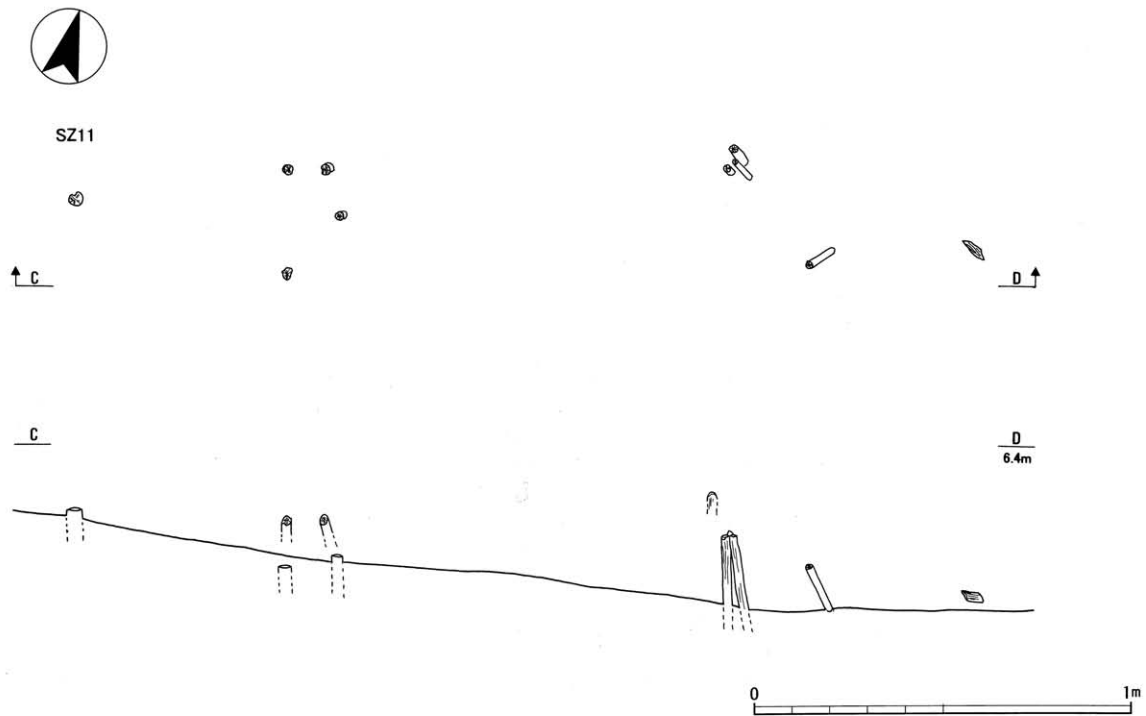
第9図 S R 12・13、足跡群、S D 41平面図(1:50) ※位置図は1:1,000



第10図 S K 17・18・19平面図・断面図(1:20)



- 1 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土 (Fe浸み) [SD4埋土]
- 2 5Y4/2灰オリーブ色粘土 (Fe浸み) [SD4埋土]
- 3 7.5Y4/1灰色シルト質粘土 (Fe浸み) [SD4埋土]
- 4 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト (Fe浸み) [SD4埋土]
- 5 N4/灰色粘土質シルト (Fe沈殿・炭化物)・
5Y8/3淡黄色粗砂 (Fe沈殿の互層) [SD4埋土]
- 6 5Y8/3淡黄色粗砂 (Fe沈殿)・N4/灰色粘土質シルト
(Fe沈殿・炭化物)の互層 [SD4埋土]
- 7 10Y5/1灰色細砂 (やや粘性) (Fe沈殿) [SD4埋土]
- 8 7.5Y8/2灰白色砂 [地山]



第11図 SD4平面図(1:100)・土層断面図(1:50)、SZ11平面図・断面図(1:20)

た。東西1.4m、南北0.9mの不定形な長方形で、深さ0.1mである。

検出時には、多数の弥生土器片が出土しており、特に大形の壺(13)は口縁部が倒立した状態で出土している。このため、倒立した、もしくは横倒しの状態であったものと考えられる。しかし、この土器は底部がなく、やはり、SK17・18と同様に削平を受けていると考えられる。

なお、調査時には壺棺墓の可能性も考えて、土壌サンプルを採取し、土壌分析を行ったが、積極的に墓とする資料は得られなかった(第V章参照)。

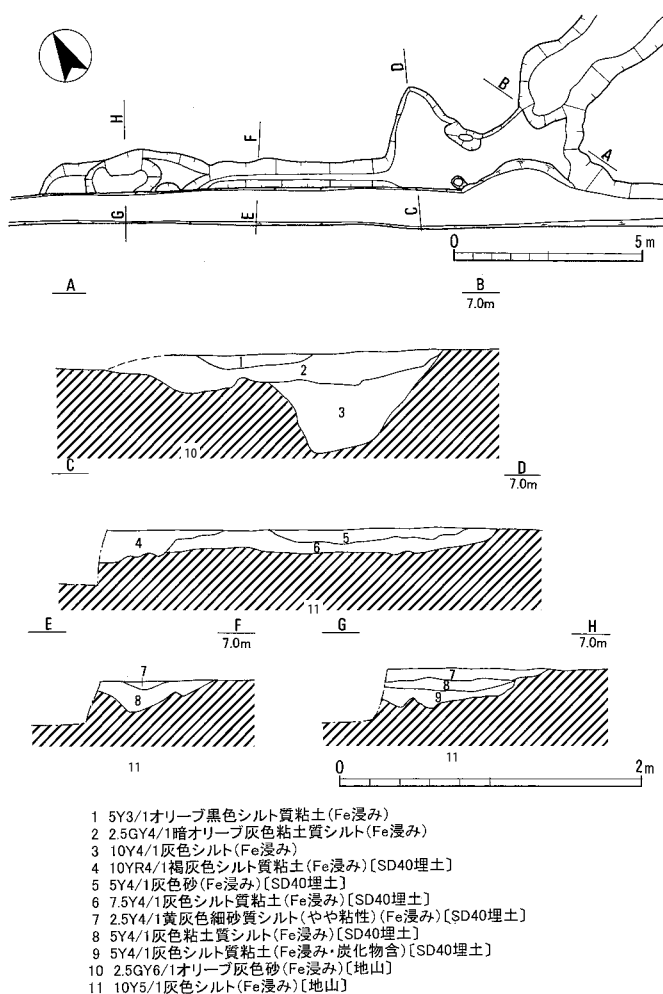
時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

(2) 溝

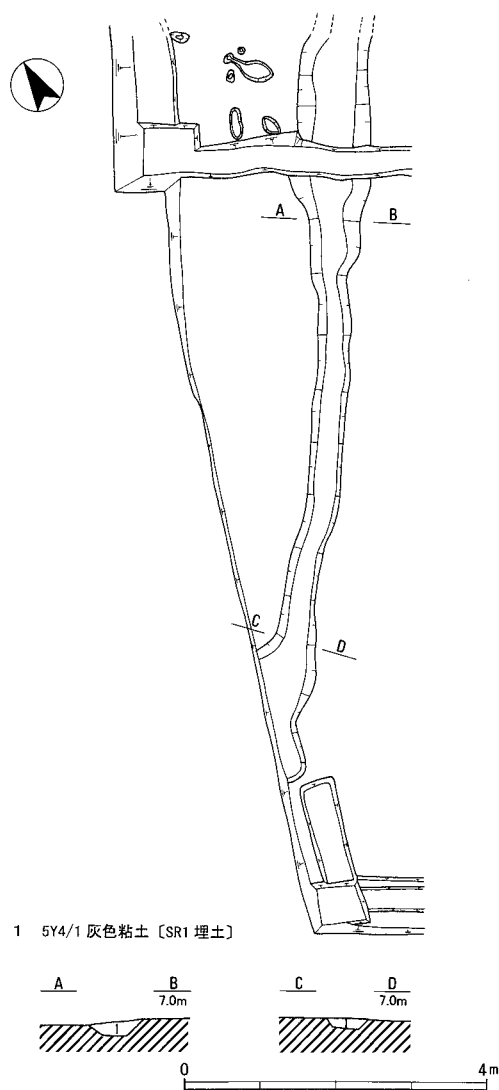
SD4 調査区東部のA11~12、B11、C9~10区で検出した。幅1.9~2.1m、深さは深い部分で0.6m、浅い部分で0.2mである。第2次調査のC地区のSD4と同一遺構である。

写真図版8で示すように、後述のSR4とは明らかな重複関係が認められ、SR4に先行する(第14図参照)。また、この遺構の西端は、SD40との重複関係があるはずだが、現地ではこれを確認することができなかった。

埋土は粘土質の土で、いわゆる還元土壌化している。最下層にはシルトと粗砂の互層や細砂層が見られる。この溝の内部施設として後述するSZ11がある。



第12図 SD40平面図(1:200)・土層断面図(1:50)



第13図 SR1平面図・断面図(1:100)

出土遺物には弥生土器、木製品がある。今回の調査区内からは、弥生時代中期中葉の土器が出土したが、第2次調査のSD4ではC地区で後期初頭の土器がまとまって出土しているため、弥生時代後期の遺構としておく。しかし、第4次調査の状況や周囲の遺構のありかたを考えると、弥生時代中期の遺構である可能性もある。なお、概報では「下層で弥生土器、上層で古墳時代の土器が出土する」と書かれているが、本報告書作成にかかる整理作業では弥生土器の出土しか見られなかった。

このSD4については、過去の調査では弥生時代後期初頭のSD4があり、その後、古墳時代中期にほぼ同じ場所にSD10が再流するとされている。今回の調査では、1条分の溝しか検出(認識)されず、なおかつ弥生土器の出土しか見られないため、上層にあるはずのSD10が検出(認識)されなかったと判断し、SD4であるとした。

SD40 調査区中央部の南端、C7～9、D6～10区で検出された。調査区外に伸びるため、幅は不明だが、広い部分では2.7m以上ある。深さは0.2～0.3mと非常に浅い遺構である。この遺構の東端は、先述のSD4との重複関係が不明瞭で、どこまで伸びるのかは不明である。第12図のA-Bライン土層図の埋土はSD4・40どちらの埋土かは不明だが、おそらくSD4の埋土と考えられる。

当初は歴史時代の条里溝である可能性を想定していたが、出土遺物は弥生土器しか見られないため、弥生時代中期中葉の遺構と判断した。

(3) 流路

SR1 調査区西端のA～C2区で検出した。幅1.1m、深さ0.1～0.2mと非常に浅い遺構である。調査区の西方に伸びていく。埋土は灰色粘土の単一層である。第2次調査C地区のSR1と同一遺構である。

出土遺物はまったくなかったが、第2次調査で弥生土器が出土しており、そこから弥生時代中期の遺構と考えられる。

(4) 杭列

SZ11 調査区東部のB・C10区で検出した。

SD4の内部に作られた杭列で、第2次調査のSZ2のように堰になっていた可能性がある。範囲は東西2.5m、南北1.0m程度である。

SD4の内部施設のため、弥生時代中期中葉の時期の遺構と考えられる。

4 古墳時代の遺構

(1) 溝

SD41 調査区東南部のSD11、SR4の下層で検出した。幅1.1～1.2m、深さ0.1mほどの遺構である。検出は下層で行ったが、断面観察の結果、表土直下からの切り込みがあることを確認したため、本来ならばSD11やSR4と同一面で検出されなければならない遺構であることが判明した。SR4の埋土で不明瞭になっていたため検出できなかったか、もしくはSR4に先行するためわからなかったか、と2つの原因を考えることができる。

時期は出土遺物から古墳時代中期と考えられる⁹⁾。

SD11 調査区東部のA・B13～14、C・D11～13区で検出した。規模は、幅2.8～4.1m、深さ0.8～1.0mである。第2次調査C地区のSD11と同一遺構である。写真図版8で示すように、後述のSR4とは明らかな重複関係が認められ、SR4に先行する。

時期は、出土遺物から古墳時代中期の遺構と考えられる。

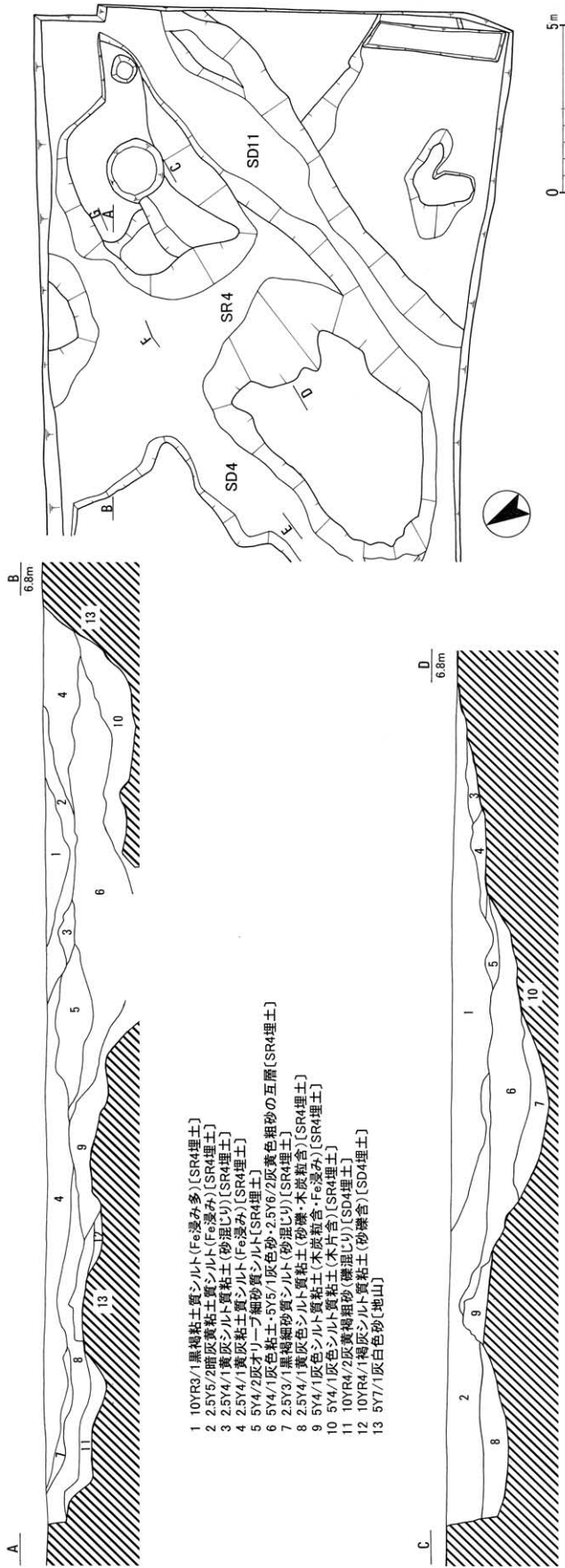
(2) 流路

SR4 調査区東部のA10～11、B11～12、C・D12～14区で検出された。幅1.8～1.9m、深さ0.5mである。第2次調査C地区のSR4、D地区のSR6と同一遺構である。写真図版8で示すように、前述のSD4・11とは明らかな重複関係が認められ、どちらにも後行する。

埋土は、基本的には粘土質のシルトで、下層にはシルトと粗砂の互層が見られる。

遺物の出土量は、本調査では最も多く、第2次調査でも比較的多くの遺物が出土している。土師器台付甕が最も多いが、高杯や須恵器の出土もある。

時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。



- 1 10YR3/1 黒褐粘土質シルト (Fe 浸み多) [SR4埋土]
- 2 2.5Y5/2 黄灰粘土質シルト (Fe 浸み) [SR4埋土]
- 3 2.5Y4/1 黄灰粘土 (砂混じり) [SR4埋土]
- 4 2.5Y4/1 黄灰粘土質シルト (Fe 浸み) [SR4埋土]
- 5 5Y4/2 オリーブ細砂質シルト [SR4埋土]
- 6 5Y4/1 灰白色粘土・5Y6/1 灰白色砂・2.5Y6/2 灰黄色粗砂の互層 [SR4埋土]
- 7 2.5Y3/1 黒褐細砂質シルト (砂混じり) [SR4埋土]
- 8 2.5Y4/1 黄灰粘土質シルト (砂混じり) [SR4埋土]
- 9 5Y4/1 灰白色粘土 (木炭粒含・Fe 浸み) [SR4埋土]
- 10 5Y4/1 灰白色粘土質シルト (木片含) [SR4埋土]
- 11 10YR4/2 灰黄褐粗砂 (礫混じり) [SD4埋土]
- 12 10YR4/1 褐灰シルト質粘土 (砂礫含) [SD4埋土]
- 13 5Y7/1 灰白色砂 (地山)

- 1 10GY4/1 暗緑灰シルト質粘土 (Fe 浸み多)
- 2 7.5GY3/1 暗緑灰シルト (Fe 浸み) [SR4埋土]
- 3 10YR3/2 黒褐細砂 (砂混じり) [SR4埋土]
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄粗砂 (粘質) [SR4埋土]
- 5 2.5Y4/1 黄灰粘土質シルト (砂混じり) [SR4埋土]
- 6 10BG3/1 暗青灰細砂質シルト (Fe 浸み・5Y8/3 淡黄色粗砂の互層) [SR4埋土]
- 7 5Y8/3 淡黄色粗砂 (SF4埋土)
- 8 2.5Y3/1 黒褐粘土質シルト (Fe 少量) [SR4埋土]
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄粗砂 (礫混じり・粘質)
- 10 7.5Y8/1 灰白色砂 (地山)

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土 (Fe 浸み) [SR4埋土]
- 2 7.5Y4/1 灰白色粘土質シルト (Fe 浸み・しまり良) [SR4埋土]
- 3 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト質細砂 (Fe 浸み) [SR4埋土]
- 4 7.5Y7/3 淡黄色砂 [SR4埋土]
- 5 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土 (雲母含)・5Y8/2 灰白色砂 (雲母含) の互層 [SR4埋土]
- 6 7.5Y4/1 灰白色シルト (Fe 浸み・しまり良) (粘性) [SD4埋土]
- 7 2.5Y3/2 黒褐色シルト質細砂 (Fe 浸み) [SD4埋土]
- 8 5Y4/1 灰白色粘土 (Fe 浸み) [SD4埋土]
- 9 5Y4/1 灰白色粘土質シルト (Fe 浸み) [SD4埋土]
- 10 2.5GY3/1 暗オリーブ灰白色粘土質シルト (雲母・炭化物・Fe 浸み) (7.5YR5/8 明褐色砂のプロック混じる) [SD4埋土]
- 11 7.5YR5/1 黒色シルト (Fe 沈殿) (7.5YR5/8 明褐色砂のプロック混じる) [SD4埋土]

- 12 2.5GY2/1 黒色シルト (粘性) [SD4埋土]
- 13 2.5GY4/1 暗オリーブ灰白色細砂 (Fe 沈殿) [SD4埋土]
- 14 5Y4/1 粘土質シルト (Fe 浸み・炭化物少量) [SD4埋土]
- 15 N4/灰白色細砂質シルト (Fe 浸み)・2.5Y7/6 明黄褐色粗砂 (Fe 浸み) の互層 [SD4埋土]
- 16 N5/灰白色細砂質シルト (Fe 浸み) [SD4埋土]
- 17 7.5Y8/2 灰白色粗砂 (Fe 沈殿) [SD4埋土]
- 18 10Y5/2 オリーブ灰白色細砂 [SD4埋土]
- 19 5Y8/1 灰白色砂 [SD4埋土]
- 20 10Y6/1 灰白色粘土 (Fe 浸み) [SD4埋土]
- 21 2.5GY4/1 暗オリーブ灰白色シルト (やや粘性) [SD4埋土]
- 22 5GY2/1 オリーブ黒色シルト質粘土 (雲母)・2.5Y7/6 明黄褐色粗砂 (雲母) の互層 [SD4埋土]
- 23 7.5Y8/1 灰白色砂 [地山]

第14図 SR4平面図(1:200)・土層断面図(1:50)

5 時期不明の遺構

(1) 土坑

S K 20 調査区中央部のC7～8区で検出した。径0.8mの円形で、東のみやや広がる形となる。深さは0.5mである。

埋土は3層にわかれ、シルトもしくはシルト質で、底へいくほど粘性が強くなる。分層したが、おそらくは水のみ込み具合によって、分けることができたのであり、単一の埋土と言えるだろう。

時期は、出土遺物がないため不明である。

S K 21 調査区東部のB9区で検出した。径0.8mの不定形な円形で、深さは0.1mと非常に浅い土坑である。

時期は、出土遺物がないため不明である。

(小林)

[註]

①三重県埋蔵文化財センター『蔵田遺跡発掘調査報告』(1999年)。

②弥生土器の年代観は下記の文献に拠った。

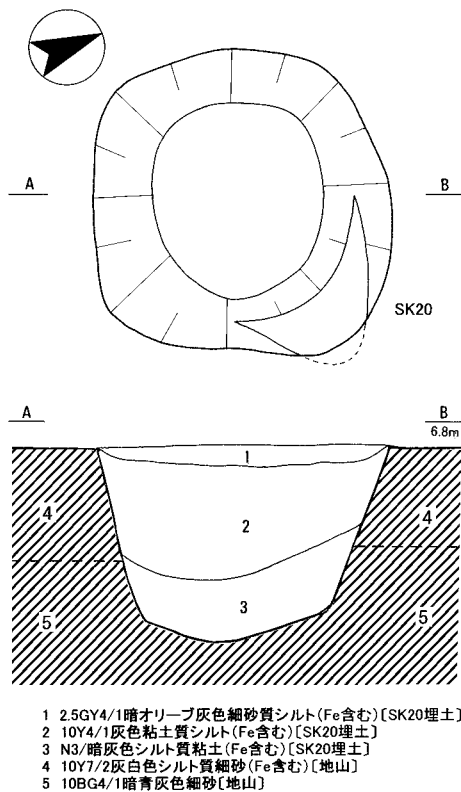
上村安生「伊勢・伊賀地域」(加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社、2002年)。

③古墳時代の土器の年代観は下記の文献に拠った。

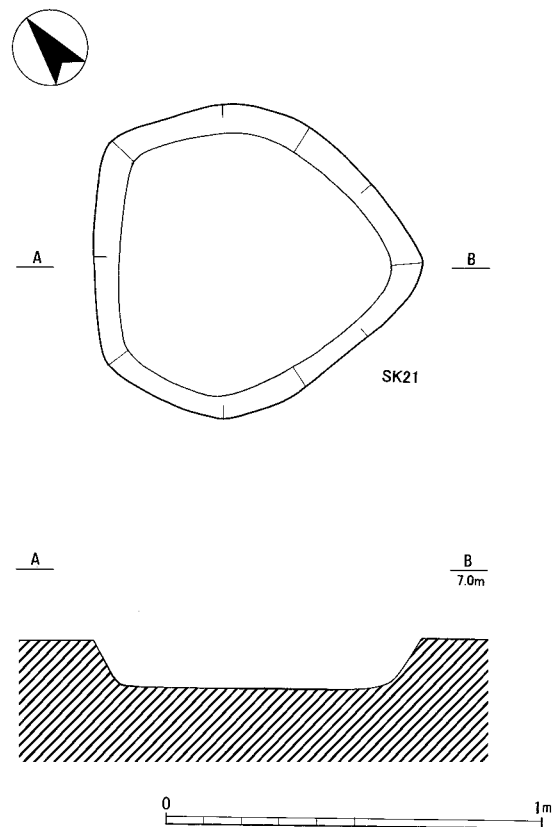
(財)愛知県埋蔵文化財センター「土器・土器群の形成」(『廻間遺跡』、1990年)。

三重県埋蔵文化財センター「雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土師器」(『嶋抜Ⅲ』、2001年)。

田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981年)。



第15図 S K 20平面図・断面図(1:20)



第16図 S K 21平面図・断面図(1:20)

報告 遺構番号	調査時 遺構番号	小地区 (グリッド)	規模	時期	備考
SK17	SK1	C4	推定径1.4m 推定深さ0.5m 残存規模0.75m×0.6m 残存深さ0.1m	弥生中期	
SK18	SK2	B5	2.1m×1.2m 深さ0.1m	弥生中期	
SK19	SK3	A6 B6	1.4m×0.9m 深さ0.1m	弥生中期	
SK20	SK4	C7~8	径0.8m 深さ0.5m	不明	
SK21	SK5	B9	径0.8m 深さ0.1m	不明	遺物なし
SR1	SD1	A2 B2 C2	幅1.1m 深さ0.1~0.2m	弥生中期	遺物なし(第2次で弥生土器 出土)
SD11	SD2	A13~14 B13~14 C11~13 D11~13	幅2.8~4.1m 深さ0.8~1.0m	古墳中期	SR7でない
SR4	SD3	A10~11 B11~12 C12~14 D12~14	幅1.8~1.9m 深さ0.5m	古墳中期	SR6も同一遺構
SD4	SD4	A11~12 B11 C9~10	幅1.9~2.1m 深さ0.2~0.6m	弥生後期	弥生中期の遺構の可能性 もある
SD40	SD5	C7~9 D6~10	幅0.7m以上 ~2.7m以上 深さ0.2~0.3m	弥生中期	
SD41	SD6		幅1.2~1.3m 深さ0.1~0.15m	古墳中期	
なし	SE1	A13 B13	1.8m×1.7m 深さ0.4m	近代以降	
なし	SZ1	C2 D2	0.5m×1.4m以上 深さ0.15m	攪乱	
なし	SZ2	B2~3	3.9m×0.5m 深さ0.5m	攪乱	
SZ11	SD4杭列	B10 C10	範囲2.5m×1.0m	弥生中期	
足跡群	足跡		範囲3.0m×7.0m以上	SR12と 同時期か	下層
SR12	下層流路1		幅2m以上	不明	下層
SR13	下層流路2		不明	不明	下層 灰色砂礫
SR14	埋没流路1		不明	不明	下層
SR15	埋没流路2		不明	不明	下層
SR16	埋没流路3		不明	不明	下層

第2表 蔵田遺跡第4次遺構一覧表

IV 出土遺物

1 下層遺構の出土遺物

S R 13出土遺物 1は押圧突帯とその上下に2条ずつの半截竹管による沈線が施されている。

S R 14出土遺物 2~4はいずれも木製品である。2は杭の先端部、3・4は用途不明品で自然木の可能性もあるが、4は板状になっており、全面に焼けた痕跡を見ることができる。なお、これらの遺物は、S K 17以前としか言うことができないため、ここに掲載することにした。

2 弥生時代の出土遺物

S K 17出土遺物 5・6はいずれも弥生土器甕である。いずれも小さな破片で風化ないし磨耗が激しいもので、調整も不明瞭である。いずれも上村安生氏による編年の伊勢Ⅱ~Ⅲ様式にあたるものであろう^①。

S K 18出土遺物 7~10はいずれも弥生土器である。7は甕で、口縁部は緩やかに外反し、体部はハケを施す。口縁部の内面は無文である。伊勢Ⅱ-2様式にあたる。同様の甕は、蔵田遺跡第2次のC地区のS K 1からも出土している。

8・9は甕の底部である。特に8には底部に焼成後に穿孔が見られる。10は無頸壺である。内傾していく口縁部の近くには、紐孔が2孔1組で施される。これらはいずれも伊勢Ⅱ-2~Ⅲ-1様式にあたるものであろう。

S K 19出土遺物 11~13はいずれも弥生土器である。11・12は壺の頸部片、肩部片である。11は横線が施されるもの、12は櫛原体の1点を中心に回転させた弧線文を対向する形で配した擬似流水文が施されている。伊勢Ⅲ-2~3様式のものであろう。

13は推定器高65.8cmにもおよぶ大形の太頸壺である。口縁部には波状押圧が見られ、肩部と胴部最大径の下部にも波状に押圧した突帯が貼り付けられている。伊勢Ⅱ-2様式にあたる。

S D 4出土遺物 14~18はいずれも弥生土器で

ある。14・15は細頸壺の口縁部で、14は受口状口縁に、15は単純口縁になっている。16は太頸壺の口縁部で、波状の押圧が見られる。17は甕の底部で、外面にややハケメが見られるものの全体的に調整は磨滅しているため不明瞭である。18は太頸壺の口縁部で、これらはいずれも伊勢Ⅲ-1様式にあたるものであろう。

19は木製品で、おそらく杭として使用したものと考えられる。丸太材で、一部に樹皮が残っている。写真図版6のような状況で出土した。

S D 40出土遺物 20~26はいずれも弥生土器である。20~22は太頸壺で、20は口縁部内面に瘤状突起が見られる。23~25は甕で、24は口縁部を強く外反させている。26は壺と考えられる。これらは、いずれも小片ばかりで不明な点も多いが、伊勢Ⅱ-2~Ⅲ-1様式のものであろう。

S D 4・40交点出土遺物 これらの遺構は、重複関係不明瞭のため、交点として遺物を取り上げた。したがって、下記の遺物はどちらかの遺構に属する遺物である。

27・28はともに弥生土器である。ともに口縁部であるが、太頸壺と甕になる。

S Z 11出土遺物 29~37はいずれも木製品で、護岸施設であろう杭列を形成していた杭である。いずれも先端部が残っていたもので、丸太材を使用しており、一部には樹皮が残るものもある。

3 古墳時代の出土遺物

S D 41出土遺物 これらは、いずれも最下層の灰色粗砂中より出土したものである。38~41は土師器で、38・39は台付甕、40は壺の口縁部、41は高杯の脚部である。38は赤塚次郎氏による分類のS字状口縁台付甕のD類にあたるもので^②、他の遺物もその時期のものと考えられる。

S D 11出土遺物 42~44は土師器である。42は台付甕の台部、43は壺の口縁部、44は杯と考えられる口縁部である。42の外面には板状工具によると思

われるナデが施されている。43の口縁部は、頸部で屈曲し、そのまますぐに広がるものである。45は須恵器の杯蓋である。田辺昭三氏による編年のTK23型式にあたるものであろう³⁾。

S R 4出土遺物 S R 4の出土遺物は、出土位置によって、S R 4出土、暗褐色シルト層出土、最下層出土の3つにわけて報告する。このうちここではS R 4全体の出土遺物について見たい。

46～60は土師器の台付甕で、D類の様相を残すものから宇田型になるものまで及ぶ。61・62は土師器の小形壺で、いずれも体部のみの破片である。61は口縁部が拡がるやや古い様相を残すものである。

63は土師器甕と考えられるもので、64・65は土師器壺の小片である。66・67は土師器の小形鉢で、外面のケズリがよくわかる⁴⁾。68～76は土師器高杯で、68は杯部が前述の小形鉢のような形態に脚が付属するものである。69は脚部をハケメで調整している。70～76は脚部の破片である。

77は須恵器で、口縁部と頸部に波状文を施す。甕の口縁部であろう。

78・79は木製品である。78は棒状の、79は板状を呈する用途不明品である。79は特に崩れが激しく、形状もよくわからない。

S R 4暗褐色シルト層出土遺物 80～82は土師器である。80は甕で、口縁部は頸部で「く」字形に屈曲したまますぐ開く。体部にはハケメの他にミガキらしき調整も見られる。81は鉢とでもすべきものか。口径9.4cm器高4.6cmと非常に小形のもので、底部に凹状にへこむ部分がある。82は高杯の脚部である。

S R 4最下層出土遺物 83～101は土師器である。83～95は台付甕で、D類から宇田型までのものがある。96は土師器甕で、胎土・調整等の見た感じは台付甕のそれに近い。97は土師器壺で、口縁端部をやや丸くおさめるものである。98は小形鉢だが、99～101については器種は不明である。

102～105は須恵器で、102は杯蓋、103・104は杯身、105は甕の頸部である。田辺編年のMT15型式にあたるものであろう。

106・107は木製品である。106は木取りが追柂目で、板状を呈し、焼けた部分がある。107は先端部

に加工があるものの、杭先のような尖頭部を持たないため、棒状木製品とした。106・107ともに用途不明のものである。

S D 11・S R 4 交点出土遺物 108～121は土師器である。108～113は台付甕で、D類から宇田型までのものがある。114は甕で、ハケを施した後ヨコナデを施す。115～117は壺で、115は二重口縁壺の可能性もある。118～121は高杯である。

122・123は須恵器で、122は杯身、123は無蓋高杯で、TK47型式にあたるものである。

S R 4・S D 4交点出土遺物 124は木製品で、杭の先端部である。

4 その他の出土遺物

灰色粘土出土遺物 S D 11より下層にある灰色粘土からの出土遺物である。125は土師器高杯の脚部である。

暗灰色シルト出土遺物 S R 4の東側外にある暗灰色シルトからの出土遺物である。126は土師器の小形鉢と思われるもので、内外面ともにミガキが見られる。

灰白色砂出土遺物 S R 4の東側外にある灰白色砂からの出土遺物である。127・128は土師器台付甕で、D類のものである。129は須恵器の壺の口縁部と思われる。

5 包含層出土遺物

130～138は弥生土器である。130・131は壺で、口縁部内面に瘤状突起と穿孔がある。伊勢Ⅲ様式のものである。132も壺だが、口縁端部に刺突列点文が施される。133～138は甕で、133は口縁を緩やかに外反させるもの、134・135は受口状口縁を呈するものである。133は伊勢Ⅱ～Ⅲ様式のものだが、135は伊勢Ⅴ-2様式くらいのものである。136は伊勢Ⅳ様式であろう。

139～149は古墳時代の土師器である。139～141は台付甕で、宇田型のものである。142・143は壺の底部、145～149は高杯である。

150は須恵器の杯蓋で、MT15型式のものである。

151～155は陶器山茶椀で、すべて尾張産のものである。藤澤良祐氏による編年の第5～6型式のものである^⑤。156は陶器天目茶椀の底部である。高台は輪高台で、露胎しており、灰白色を呈する。藤澤良祐氏による古瀬戸編年の後IV新时期くらいのものであろうか^⑥。

(小林)

〔註〕

①以下、弥生土器については下記の文献に拠った。

上村安生「伊勢・伊賀地域」(加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社、2002年)。

②以下、土師器台付甕については下記の文献に拠った。

(財)愛知県埋蔵文化財センター「土器・土器群の形成」(『廻間遺跡』、1990年)。

③以下、須恵器については下記の文献に拠った。

田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981年)。

④三重県埋蔵文化財センター「雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土師器」(『嶋抜Ⅲ』、2001年)。

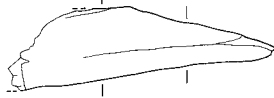
⑤藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年)。

⑥藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」(『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯、1997年)。

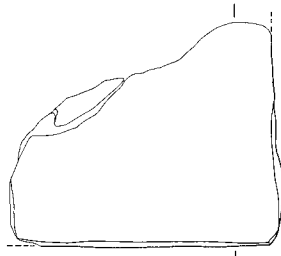
SR13
(1)



SR14(2~4)



2

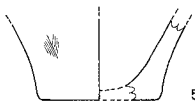


4

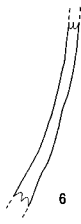
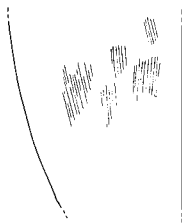


3

SK17(5~6)

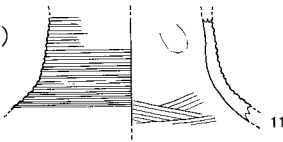


5

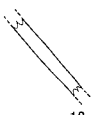


6

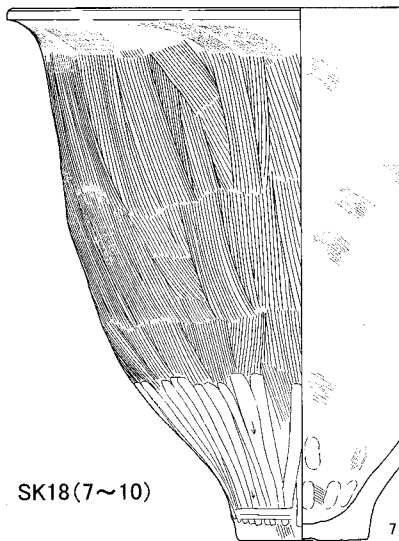
SK19(11~13)



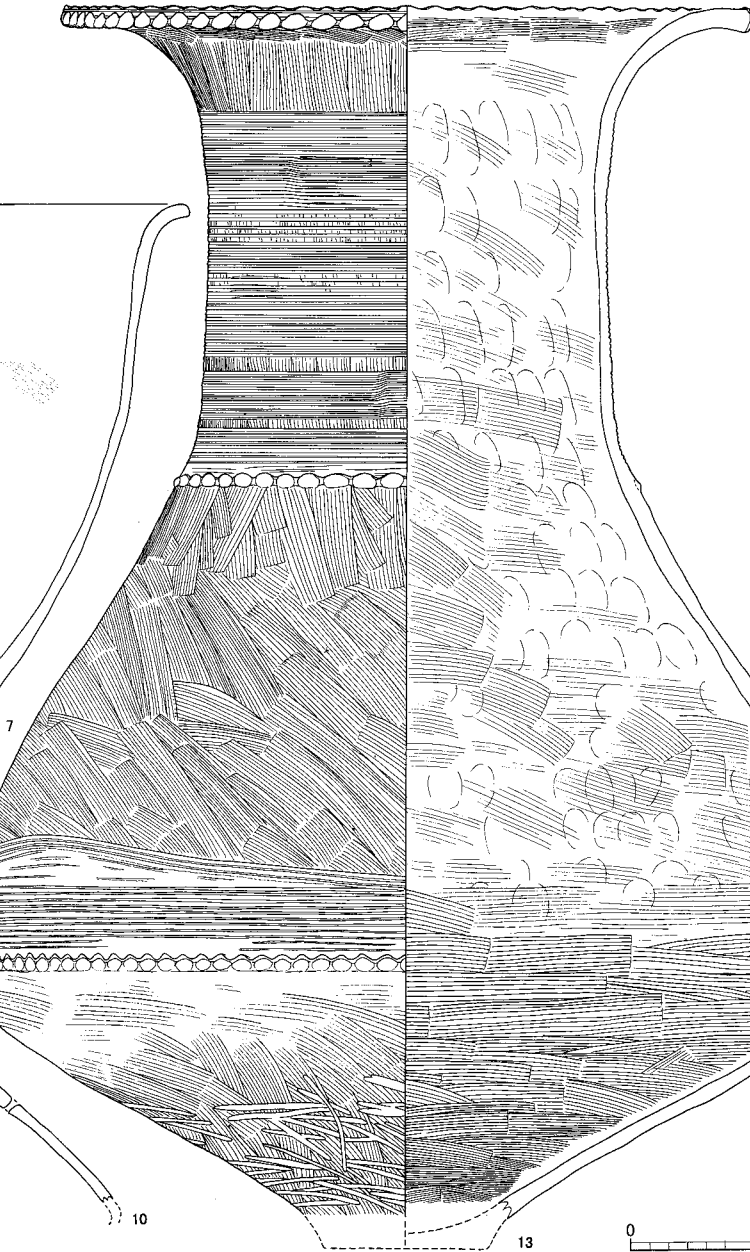
11



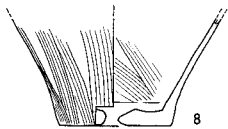
12



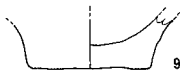
SK18(7~10)



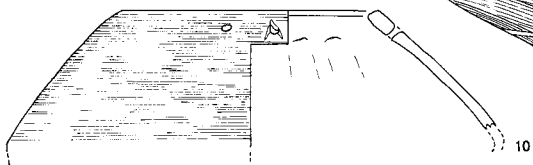
13



8



9

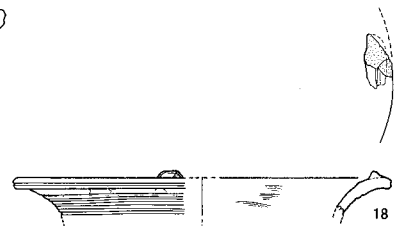
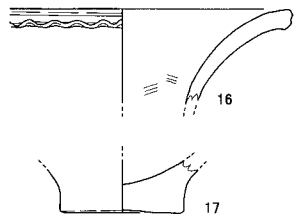
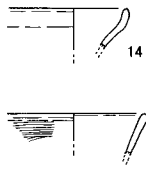


10

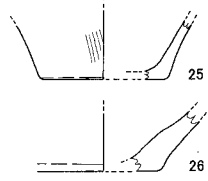
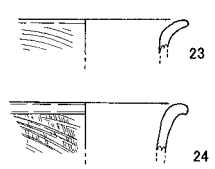
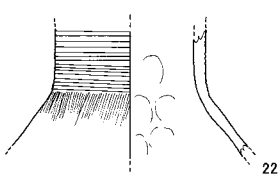
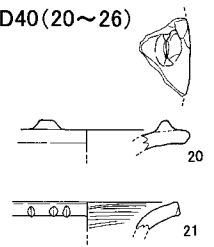
0 10cm

第17図 出土遺物実測図①(1:4)

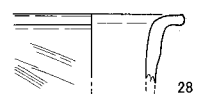
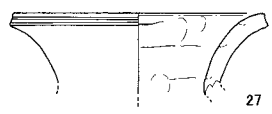
SD4
(14~19)



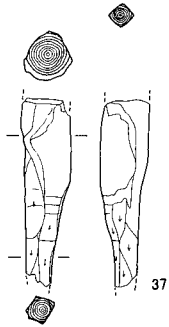
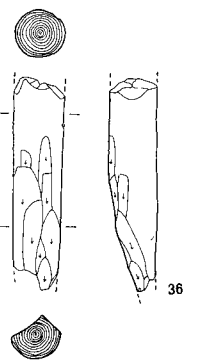
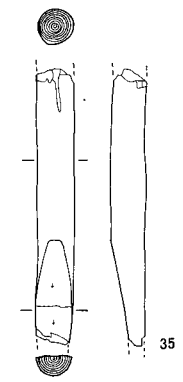
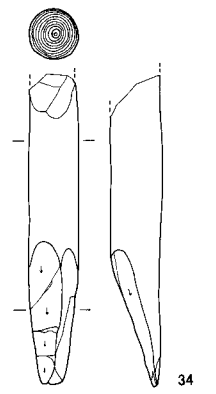
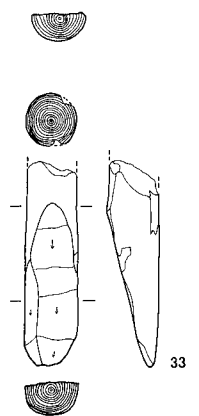
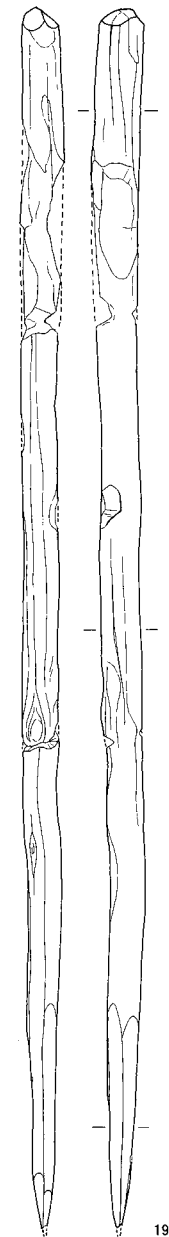
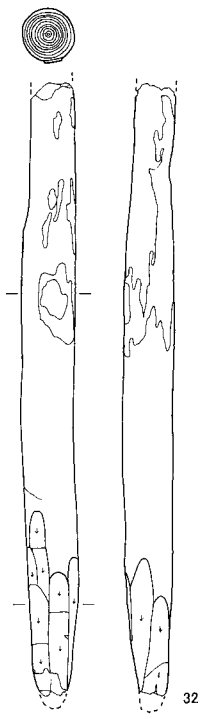
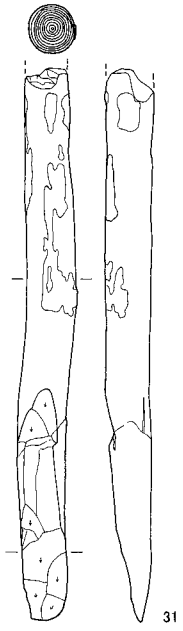
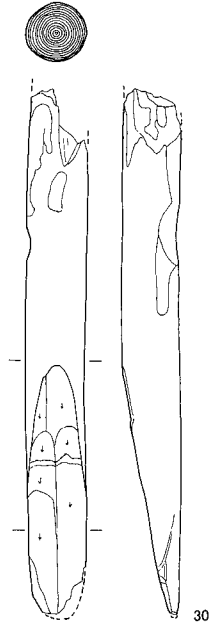
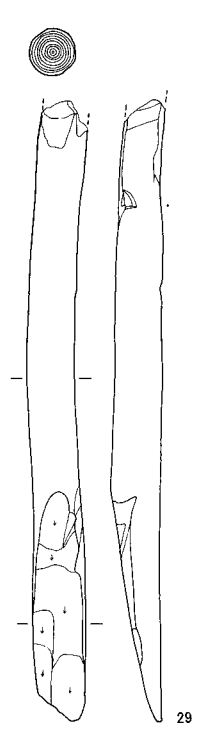
SD40(20~26)



SD4・40交点(27~28)



SZ11(29~37)

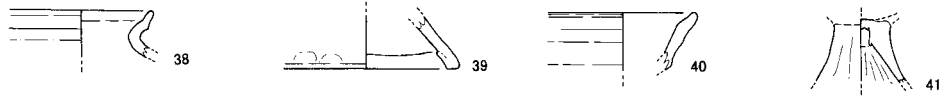


0 20cm

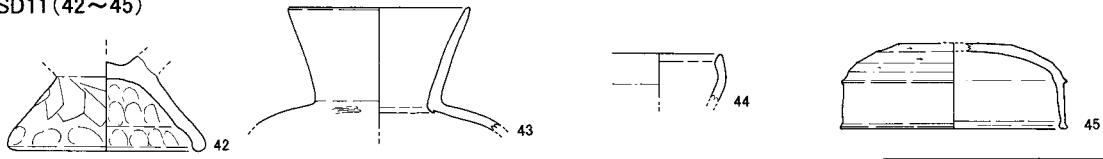
0 30cm

第18図 出土遺物実測図②(1:4、19は1:6)

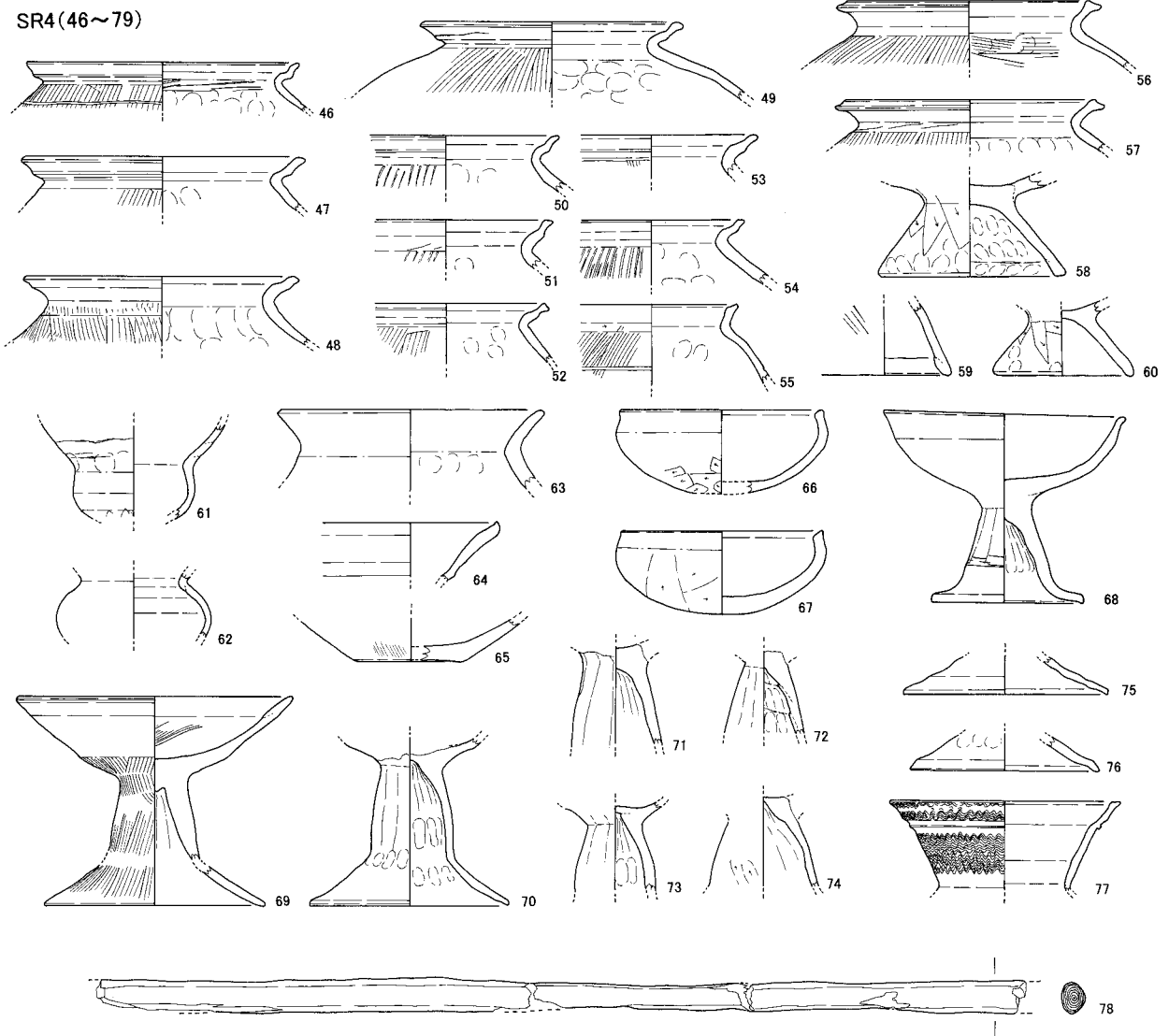
SD41(38~41)



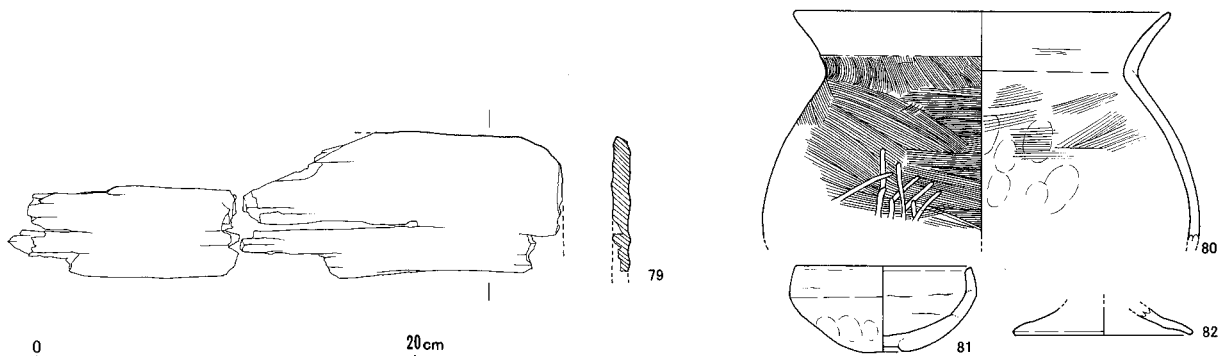
SD11(42~45)



SR4(46~79)



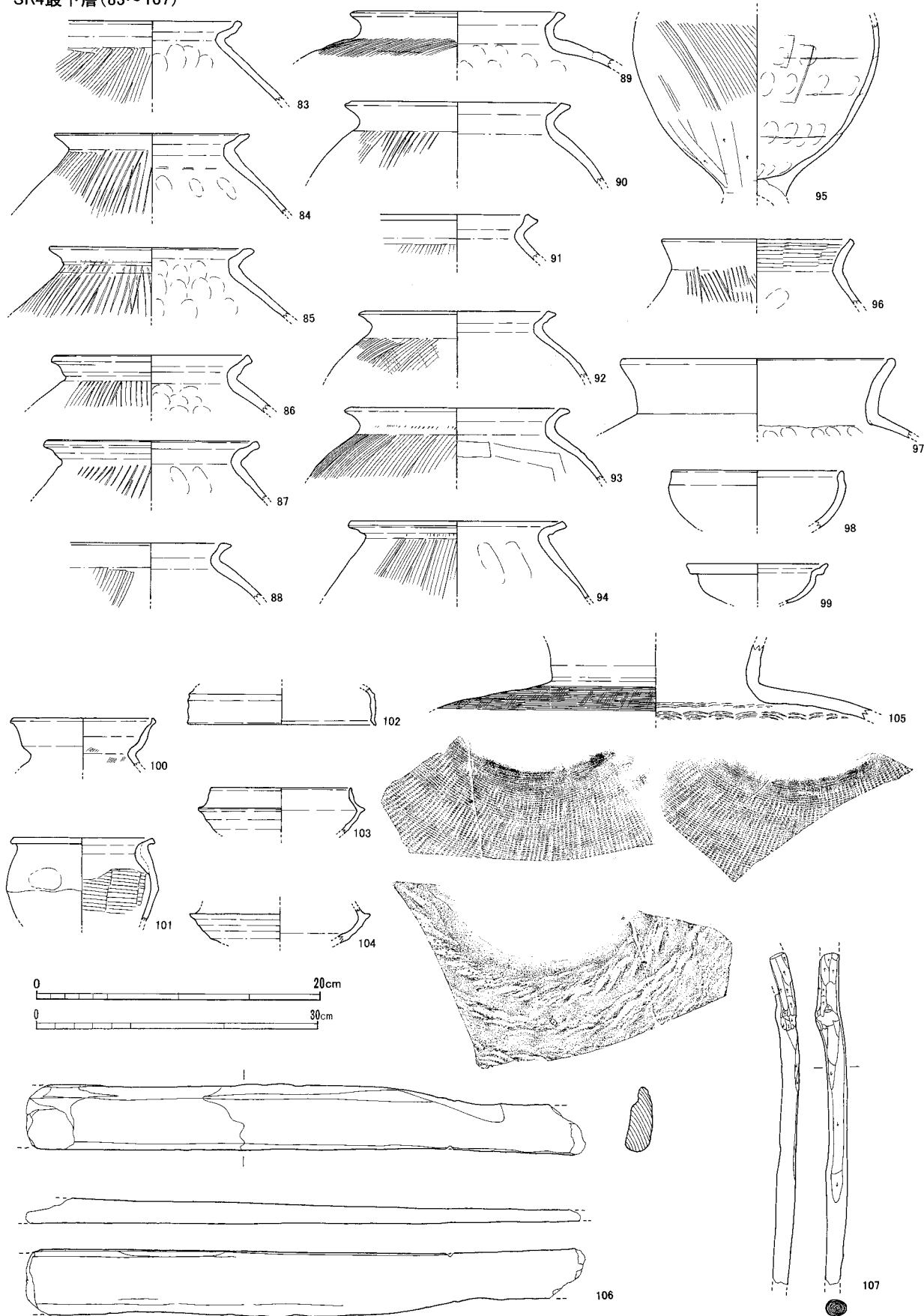
SR4暗褐色シルト層(80~82)



0 20cm

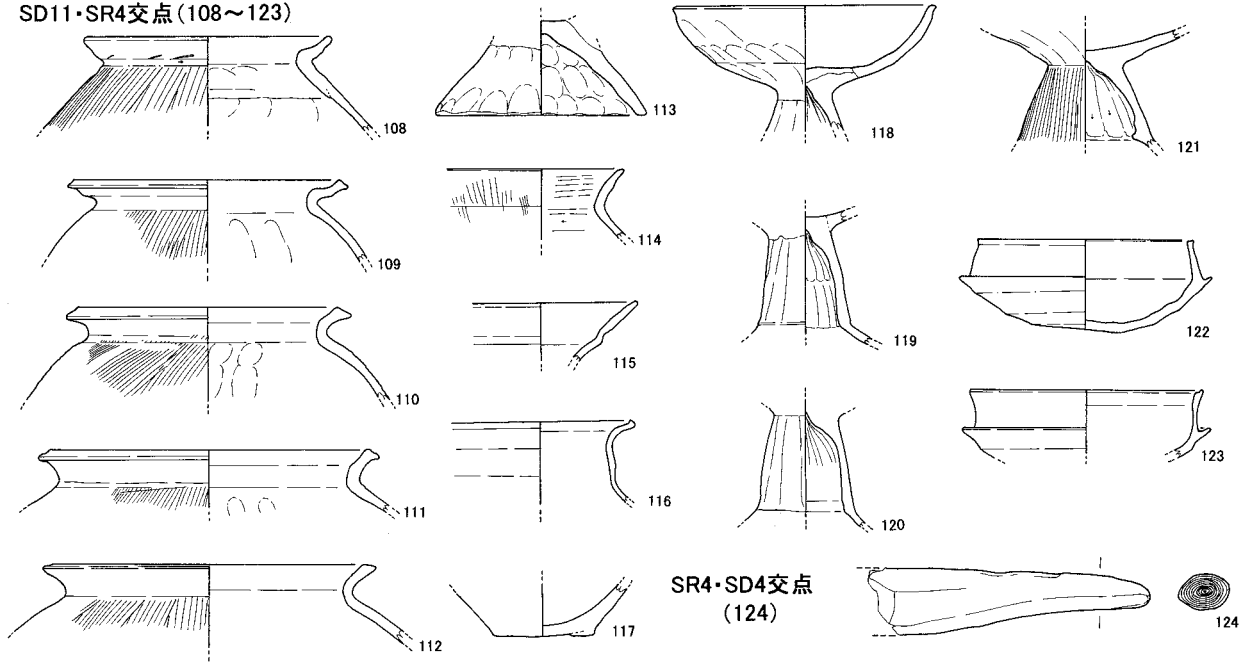
第19図 出土遺物実測図③(1:4)

SR4最下層(83~107)



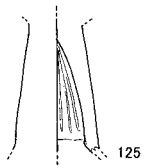
第20図 出土遺物実測図④(1:4、106・107は1:6)

SD11・SR4交点(108~123)

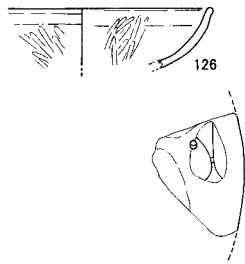


SR4・SD4交点
(124)

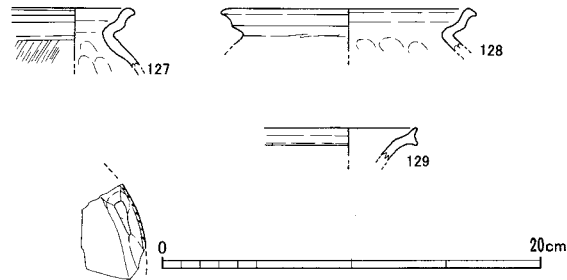
灰色粘土(125)



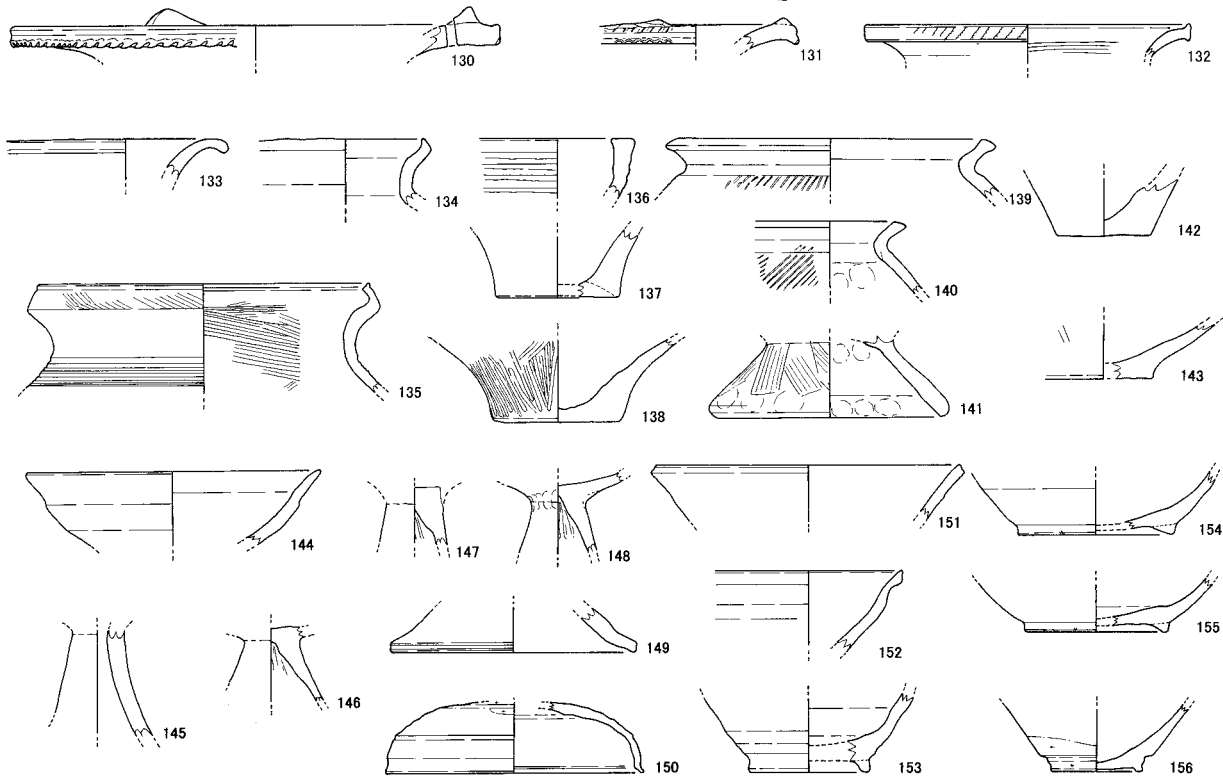
暗灰色シルト(126)



灰白色砂(127~129)



包含層(130~156)



第21図 出土遺物実測図⑤(1:4)

報告 番号	概報 番号	実測 番号	種類	器種等	グリ ッド	出土遺構 出土層位	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
							口径	器高	底径						
1	23	027-01	縄文 土器か	鉢か	B13	SR13灰色砂礫	—	4.3以上	—	外:半截竹管2条、押圧突帯 内:ナデ	粗	良	灰白 2.5Y8/1	体部 小片	
2	—	002-02	木製品	杭		SR14 (第1遺構面 より140cm下)	現長 14.2	太さ 4.0×3.6							
3	—	002-01	木製品	不明品		SR14 (第1遺構面 より140cm下)	現長 27.4	太さ 5.6×6.5							流木か?
4	—	002-03	木製品	不明 板材		SR14 (第1遺構面 より140cm下)	現長 14.5	現幅 11.9	現厚 2.4						
5	24	005-01	弥生土器	甕	C4	SK17土器No.1	—	4.3以上	6.2	外:少しハケあり	粗	良	明赤褐 5YR5/6	底部 1/3	風化大で調整 不明瞭
6	—	005-02	弥生土器	甕	C4	SK17	—	9.9以上		外:ハケ(9本/cm)	粗	良	にぶい褐 7.5YR5/4	小片 多数	磨耗著しい
7	27	006-01	弥生土器	甕	B5	SK18土器No.1	28.8	28.4	6.7	外:ヨコナデ、ハケ(6本/cm)、 棒状具によるナデ 内:ヨコナデ、 オサエ後ハケ(7本/cm)	粗	良	浅黄橙 10YR6/3	全体 2/3 口縁部 3/8	
8	26	006-03	弥生土器	甕	B5	SK18土器No.1	—	5.7以上	6.0	外:ハケ(5本/cm) 内:ハケ、ナデ 底:板ナデ、焼成後穿孔	やや 粗	良	にぶい褐 7.5YR5/4	底部 完形	
9	25	006-02	弥生土器	甕	B5	SK18土器No.3	—	2.8以上	6.5	外:風化大で調整不明 内:ユビオサエ後ナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 完形	
10	—	007-01	弥生土器	無頸壺	B5	SK18土器No.3	11.0 ~14.0	7.4以上	—	外:ハケ(6本/cm)、 紐孔(2孔1組が2対以上) 内:粘土接合痕	粗	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/3	
11	28	008-01	弥生土器	壺	B6	SK19土器No.1	—	5.5以上	—	外:横線16本(単位不明) 内:ユビオサエ後ナデ、 ハケ(5本/cm)	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	頸部 小片	
12	29	008-02	弥生土器	壺	B6	SK19土器No.1	—	4.2以上	—	外:弧線文による擬似流水文	やや 粗	良	灰黄 2.5Y6/2	肩部 小片	
13	30	009-01	弥生土器	壺	B6	SK19	36.0	推定 65.8	—	外:口縁部に波状押圧、ヨコナデ、 ハケ(7本/cm)、 描横線文(4本/cm)、 貼付突帯、ヘラミガキ 内:ヨコナデ、ハケ(7本/cm)、 オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	2/5	
14	—	022-04	弥生土器	壺	D10	SD4	—	2.2以上	—	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ	粗	良	にぶい黄橙 7.5YR7/4	口縁部 小片	
15	—	022-05	弥生土器	壺		SD4下層 還元土壌	—	2.3以上	—	外:ヨコナデ、ヨコハケ(6本/cm) 内:ヨコナデ	やや 粗	良	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部 小片	
16	—	022-03	弥生土器	壺	B10	SD4下層 還元土壌	—	5.2以上	—	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ?、ハケ?	粗	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁部 小片	
17	—	022-02	弥生土器	甕	B10	SD4下層 還元土壌	—	2.8以上	6.1	外:ナデ、ハケ(6本/cm) 内:ナデ	粗	良	淡黄 2.5Y8/3	底部 1/2	
18	18	022-01	弥生土器	壺	B10	SD4下層	9.2 ~10.8	2.4以上	—	外:口縁部に貼付浮文、 描横線文(7本/cm)、 ヨコナデ、オサエ 内:ナデ	やや 粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/11	
19	—	004-01	木製品	杭	B10	SD4下層 還元土壌	長さ 108.1	太さ4.1							丸太材
20	—	024-07	弥生土器	壺	D7	SD40	—	1.7以上	—	外:口縁部に瘤状突起、ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰黄褐 10YR5/2	口縁部 小片	
21	—	024-11	弥生土器	壺	C10	SD40	—	1.5以上	—	外:ヨコナデ、刻み 内:ハケ(5本/cm)	やや 密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 小片	
22	—	024-09	弥生土器	壺	D7	SD40	—	6.9以上	—	外:ハケ(9~10本/cm)、 描横線文(6本/cm) 内:オサエ後ナデ	粗	良	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:にぶい黄橙 10YR7/3	頸部 1/5	
23	—	024-08	弥生土器	甕	D7	SD40	—	1.8以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰黄橙 10YR4/2	口縁部 小片	
24	—	024-10	弥生土器	甕	D7	SD40	—	2.7以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(4~5本/cm) 内:ヨコナデ	やや 粗	良	黒褐 10YR3/2	口縁部 小片	
25	—	024-06	弥生土器	甕	D8	SD40	—	3.2以上	6.6	外:ハケ(7本/cm)、ナデ? 内:ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 1/4	風化のため 調整不明瞭
26	—	024-05	弥生土器	壺か	D8	SD40	—	3.2以上	—	風化のため調整不明	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 小片	
27	19	023-01	弥生土器	壺	C10	SD4・40交点	13.3	4.3以上	—	外:口縁端部に沈線、 ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、 オサエ後ヨコナデ	密	良	灰白 10YR8/2	口縁部 1/4	
28	—	023-02	弥生土器	甕	C10	SD4・40交点	—	3.6以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(単位不明) 内:ヨコナデ、ナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 小片	
29	—	001-05	木製品	杭	C10	SZ11木-5	現長 32.9	太さ2.6							丸太材
30	—	001-04	木製品	杭	C10	SZ11木-4	現長 27.9	太さ3.1							丸太材
31	—	001-02	木製品	杭	C10	SZ11木-2	現長 29.4	太さ2.5							丸太材
32	—	001-03	木製品	杭	C10	SZ11木-3	現長 32.5	太さ2.7							丸太材
33	—	001-08	木製品	杭	C10	SZ11木-8	現長 10.9	太さ2.9							丸太材
34	—	001-09	木製品	杭	C10	SZ11木-10	現長 16.6	太さ2.6							丸太材
35	—	001-01	木製品	杭	C10	SZ11木-1	現長 14.7	太さ1.9							丸太材
36	—	001-06	木製品	杭	C10	SZ11木-6	現長 11.3	太さ2.6							丸太材
37	—	001-07	木製品	杭	C10	SZ11木-7	現長 10.0	太さ2.5							丸太材

第3表 出土遺物観察表①

報告 番号	概報 番号	実測 番号	種類	器種等	グリ ッド	出土遺構 出土層位	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
							口径	器高	底径						
38	20	024-03	土師器	甕	C14	SD41最下層 灰色粗砂中	—	2.5以上	—	外:ヨコナデ、工具ナデ、 ハケ(単位不明) 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰白 10YR8/2	口縁部 小片	
39	22	024-01	土師器	甕	C14	SD41最下層 灰色粗砂中	—	2.9以上	—	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部 1/8	
40	21	024-02	土師器	壺	C14	SD41最下層 灰色粗砂中	—	3.0以上	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 小片	
41	—	024-04	土師器	高杯	C14	SD41最下層 灰色粗砂中	—	3.5以上	—	外:ナデ 内:シボリ	やや 密	良	淡黄 2.5YR8/3	脚柱部 のみ	
42	—	010-03	土師器	甕	B13	SD11	—	5.0以上	台径 9.7	外:板ナデ、オサエ、ヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや 密	良	灰白 2.5Y8/2	台部 1/3	
43	2	010-01	土師器	壺	C13	SD11	9.4	6.5以上	—	外:ヨコナデ、ミガキ? 内:ヨコナデ、ナデ	やや 密	良	橙 5YR7/8	口縁部 1/12	
44	—	010-05	土師器	杯か	C13	SD11	—	2.5以上	—	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/3	小片	
45	1	010-02	須恵器	杯蓋	B13	SD11	11.9	4.5以上	—	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ	やや 粗	良	灰 N6/	1/3	
46	—	014-04	土師器	甕	C12	SR4	15.4	2.7以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ、ハケ(5本/cm)、 オサエ、ナデ	やや 粗	良	淡黄橙 10YR8/3	口縁部 1/6	
47	—	014-03	土師器	甕	B11	SR4	15.6	3.1以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/10	
48	10	018-01	土師器	甕	C13	SR4	14.9	3.9以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/6	
49	—	016-03	土師器	甕	B12	SR4	14.4	4.4以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm)、 粘土接合痕 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	
50	—	014-06	土師器	甕	C12	SR4	—	3.3以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 小片	
51	—	014-08	土師器	甕	C13	SR4	—	2.8以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 小片	
52	—	017-14	土師器	甕	C12	SR4	—	3.3以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(単位不明) 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや 粗	良	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 小片	
53	—	014-05	土師器	甕	C12	SR4	—	2.2以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(単位不明) 内:ヨコナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 小片	
54	—	014-07	土師器	甕	C13	SR4	—	3.7以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 粗	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 小片	
55	—	017-08	土師器	甕	A11 B11	SR4セクション ベルト内	—	4.5以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ後ヨコナデ	密	良	灰白 10YR7/1	口縁部 小片	
56	—	014-02	土師器	甕	B11	SR4	13.7	3.8以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ、工具ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/7	
57	—	014-01	土師器	甕	B11	SR4	14.0	3.0以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/4	
58	—	017-03	土師器	甕	C12	SR4	—	5.7以上	10.0	外:板ナデ、オサエ、ナデ 内:オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	台部 1/2	
59	—	017-13	土師器	甕	C13	SR4	—	4.1以上	—	外:ナデ後板ナデ、ナデ 内:オサエ後ヨコナデ、オサエ	粗	良	淡黄 2.5Y8/3	台部 小片	
60	—	017-04	土師器	甕	C12	SR4	—	4.3以上	7.6	外:板ナデ、オサエ 内:ナデ、ヨコナデ	粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	台部 完形	
61	—	015-04	土師器	小形壺	B11	SR4	—	5.4以上	—	外:ヨコナデ、ナデ? 内:ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	頭部 1/4	
62	—	016-04	土師器	小形壺	B12	SR4	—	3.8以上	—	外:ナデ? 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	淡橙 5YR8/4	1/4	内外面共風化 進み調整不明瞭
63	—	016-06	土師器	甕	C13	SR4	14.8	4.6以上	—	外:ヨコナデ、ナデ? 内:ヨコナデ、オサエ後ヨコナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	頭部 1/5	
64	—	017-10	土師器	壺	C13	SR4	—	3.4以上	—	外:ナデ、ハケ後ナデ 内:ナデ	密	良	にぶい赤橙 10R6/4	口縁部 小片	
65	—	017-11	土師器	壺	C12	SR4	—	2.4以上	6.0	外:ハケ、ナデ 内:ナデ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	底部 1/2	
66	—	015-03	土師器	小形鉢	B11	SR4	11.4	4.8	—	外:ヨコナデ、オサエ、ケズリ 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	外:橙2.5YR6/8 内:橙7.5YR7/6	1/5	
67	6	015-02	土師器	小形鉢	B11	SR4	11.3	4.7	—	外:ヨコナデ、ケズリ 内:ヨコナデ、ナデ	粗	良	浅黄橙 10YR8/3	1/2	
68	7	015-01	土師器	高杯	C13	SR4	13.5	10.7	台径 8.5	外:ヨコナデ、オサエ後ナデ、 面取り 内:ヨコナデ、シボリ	やや 粗	良	橙 5YR6/6	口縁部 4/5 脚1/2	
69	—	016-02	土師器	高杯	B12	SR4	15.5	11.8	台径 12.5	外:ヨコナデ、ハケ(6本/cm)、 ナデ 内:シボリ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	良	灰黄褐 10YR6/2	口縁部 1/4 台径 1/8	
70	—	017-02	土師器	高杯	B11	SR4	—	9.5以上	11.2	外:ナデ、ヨコナデ 内:シボリ、オサエ、ヨコナデ	やや 密	良	灰黄褐 10YR6/2	脚部 1/2	
71	—	017-09	土師器	高杯	C13	SR4	—	5.8以上	—	外:板ナデ 内:シボリ、ヨコナデ	やや 密	良	灰白 2.5Y7/1	脚上部	
72	—	017-06	土師器	高杯	B11	SR4	—	4.6以上	—	外:ナデ 内:シボリ、オサエ	やや 密	良	浅黄橙 10YR8/3	脚柱部 1/3	
73	—	017-05	土師器	高杯	B11	SR4	—	5.0以上	—	外:ナデ 内:シボリ、オサエ	やや 粗	良	灰白 10YR8/2	脚柱部 1/3	
74	—	016-07	土師器	高杯	C12	SR4	—	5.1以上	—	外:ナデ、ケズリ 内:ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	脚柱部 1/4	
75	—	017-07	土師器	高杯	B11	SR4	—	2.2以上	台径 11.4	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	脚部 1/5	
76	—	016-05	土師器	高杯	C13	SR4	—	2.0以上	台径 10.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	脚部 1/4	
77	—	016-01	須恵器	甕	B11	SR4	12.9	5.1以上	—	外:回転ナデ、 波状文(11本/cm) 内:回転ナデ	やや 粗	良	灰N5/	口縁部 1/6	
78	—	002-04	木製品	棒状 木製品	C12	SR4	現長 52.7	現幅 2.1	現厚 1.3						
79	—	002-05	木製品	不明品	C12	SR4	現長 29.3	現幅 7.9	現厚 1.3						丸太材

第4表 出土遺物観察表②

報告 番号	概報 番号	実測 番号	種類	器種等	グリ ッド	出土遺構 出土層位	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
							口径	器高	底径						
80	9	019-01	土師器	甕	B12	SR4暗褐色シルト	19.6	12.1以上	—	外:ハケ後ヨコナデ、ハケ (11~12本/cm)、ミガキ 内:ハケ後ヨコナデ、 オサエ後ハケ後ナデ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁~ 体部1/2	
81	—	021-03	土師器	小形鉢	B12	SR4暗褐色シルト	9.4	4.6	—	外:ヨコナデ、オサエ後ナデ 内:ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	3/4	
82	—	021-05	土師器	高杯	B12	SR4暗褐色シルト	—	1.6以上	台径 9.4	外:ナデ 内:ナデ	やや 密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	脚部 1/6	
83	—	030-03	土師器	甕	A11	SR4最下層 セクションベルト	—	5.6以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) スス付着 内:ヨコナデ、ナデ	粗	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/8	
84	11	020-02	土師器	甕	B11	SR4最下層 セクション内	13.8	5.7以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ後ハケ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/2	
85	12	018-02	土師器	甕	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト 最下層	14.4	4.9以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/6	
86	—	032-02	土師器	甕	C12	SD3黄灰色砂 セクションベルト 最下層	13.5	4.0以上	—	外:ヨコナデ、ハケメ(4本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 1/5	
87	—	031-03	土師器	甕	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト 最下層	14.7	4.2以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm)、 工具ナデ 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 粗	良	浅黄 2.5Y7/3	口縁部 1/10	
88	—	030-04	土師器	甕	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト 最下層	—	3.9以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) スス付着 内:ヨコナデ、ナデ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 小片	
89	—	031-06	土師器	甕	A11	SR4最下層 セクションベルト	14.3	4.0以上	—	外:ヨコナデ、ハケメ(4本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 粗	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/8	
90	—	030-01	土師器	甕	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト	14.7	5.7以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 1/4	
91	—	030-05	土師器	甕	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト 最下層	—	3.2以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	褐灰 10YR6/1	口縁部 小片	
92	—	030-02	土師器	甕	A11	SR4最下層 セクションベルト	12.9	4.7以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰白 2.5Y8/2	口縁部 1/6	
93	13	020-03	土師器	甕	B11	SR4最下層 セクション内	14.6	5.1以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ、工具ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/2	
94	—	031-05	土師器	甕	A11	SR4最下層 セクションベルト	15.0	5.5以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 粗	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 1/10	
95	—	020-04	土師器	甕	A11	SR4最下層 セクションベルト	—	12.4以上	—	外:ハケメ(4本/cm)、ケズリ 内:オサエ後板ナデ、 オサエ後布状具によるナデ	やや 密	良	褐灰 10YR5/1	体胴部 1/3	
96	—	031-02	土師器	甕	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト 最下層	13.2	4.6以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm)、 スス付着 内:ハケ(4本/cm)、ナデ	やや 密	良	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/5	
97	8	020-01	土師器	壺	A11	SR4最下層 セクションベルト	19.1	5.6以上	—	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	粗	良	灰白 10YR7/1	口縁部 1/4	
98	—	031-01	土師器	小形鉢	B12	SR4セクション ベルト最下層	12.0	4.1以上	—	外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ	やや 密	良	橙 2.5YR6/8	口縁部 1/5	
99	—	018-03	土師器	不明	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト 最下層	10.0	2.8以上	—	外:ナデ 内:ナデ	やや 密	良	橙 7.5YR6/6	口縁部 1/10	
100	—	018-05	土師器	不明	A11	SR4最下層 セクションベルト	10.2	3.3以上	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/10	
101	—	018-04	土師器	不明	B12	SR4セクション ベルト最下層	10.0	5.9以上	—	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや 粗	良	灰黄 2.5Y6/2	1/5	
102	3	020-07	須恵器	杯蓋	A11	SR4最下層 セクションベルト	13.3	2.7以上	—	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや 密	良	灰N4/	1/10	
103	4	020-05	須恵器	杯身	B11	SR4最下層 セクション内	10.0	3.3以上	—	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや 密	良	暗灰 N2/	口縁部 1/8	
104	5	020-06	須恵器	杯身	A11	SR4最下層 セクションベルト	—	2.5以上	—	外:回転ナデ、ケズリ 内:回転ナデ	やや 粗	良	青灰 5B5/1	1/10	
105	—	032-01	須恵器	甕	C12	SR4黄灰色砂 セクションベルト 最下層	—	5.2以上	—	外:ヨコナデ、 タタキ後カキメ(8本/cm)	やや 粗	良	外:灰N5/ 内:灰白 5Y7/1	頸部 1/3	
106	—	003-01	木製品	不明 板材	B12	SR4セクション ベルト最下層	現長 58.5	現幅 7.1	現厚 2.5						焼けあり 追柱目
107	—	003-02	木製品	棒状 木製品	A11	SR4最下層 セクションベルト	現長 35.1	径2.3							丸太材
108	15	011-03	土師器	甕	C13	SD11・SR4交点	12.6	5.0以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(6本/2cm) 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや 粗	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/4	
109	—	013-06	土師器	甕	C13	SD11・SR4交点	14.0	4.3以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) スス少し付着 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや 密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部 1/4	
110	—	013-04	土師器	甕	C13	SD11・SR4交点	13.7	4.9以上	—	外:ヨコナデ、ハケメ(5本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/8	
111	—	013-05	土師器	甕	C13	SD11・SR4交点	16.9	3.4以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(6本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/8	
112	16	011-04	土師器	甕	C13	SD11・SR4交点	16.4	4.3以上	—	外:ヨコナデ、ハケ(7本/2cm) 内:ナデ	やや 密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/6	
113	—	013-01	土師器	甕	C13	SD11・SR4交点	—	5.0以上	台径 11.0	外:オサエ後ナデ 内:オサエ後ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	台部 のみ	
114	—	012-07	土師器	甕	C12	SD11・SR4交点	—	3.7以上	—	外:ヨコナデ、ハケ 内:ハケ後ヨコナデ、ケズリ	やや 粗	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 小片	
115	—	012-06	土師器	壺	C12	SD11・SR4交点	—	3.2以上	—	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	やや 密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 小片	磨滅大
116	—	012-08	土師器	不明	C13	SD11・SR4交点	—	4.4以上	—	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 密	良	橙 7.5YR6/6	口縁部 小片	
117	—	012-04	土師器	壺	C12	SD11・SR4交点	—	2.8以上	5.1	外:ナデ? 内:工具による調整後ナデ	粗	良	浅黄橙 7.5YR8/6	底部 のみ	
118	—	013-03	土師器	高杯	C13	SD11・SR4交点	13.6	6.7以上	—	外:ナデ、オサエ、 オサエ後ナデ 内:ナデ 風化著しい	やや 粗	良	橙 5YR7/8	口縁部 1/2	
119	—	012-05	土師器	高杯	C12	SD11・SR4交点	—	7.1以上	—	外:面取り、ヨコナデ 内:シボリ、ヨコナデ	やや 密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	脚部 のみ	

第5表 出土遺物観察表③

報告 番号	概報 番号	実測 番号	種類	器種等	グリ ッド	出土遺構 出土層位	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
							口径	器高	底径						
120	-	012-03	土師器	高杯	C13	SD11・SR4交点	-	6.3以上	-	外:風化大で面取り 痕のみ少し残る 内:ナデ、シボリ	粗	良	にぶい橙 5YR7/3	脚柱部 のみ	
121	-	013-02	土師器	高杯	C13	SD11・SR4交点	-	6.3以上	-	外:ナデ、工具による調整 内:シボリ、ナデ	やや 粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	脚柱部 のみ	
122	17	011-01	須恵器	杯身	C12	SD11・SR4交点	11.4	4.9	-	外:ロクロナデ、ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや 密	良	灰 N6/	完形	
123	-	011-02	須恵器	高杯	C12	SD11・SR4交点	12.2	3.6以上	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰 N5/	口縁部 1/8	
124	-	003-03	木製品	杭	B12	SR4・SD4交点	現長 14.8	径3.6							丸太材
125	-	025-02	土師器	高杯	B13	灰色粘土 (SD11より下層)	-	7.2以上	-	外:ナデ 内:シボリ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	脚柱部 のみ	
126	-	026-10	土師器	小形鉢	A12 A13	暗灰色シルト (SR4東側外)	-	3.2以上	-	外:ヨコナデ、ミガキ 内:ミガキ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 小片	
127	-	026-06	土師器	壺	B12	灰白色砂 (セクションベルト内 SR4の東側外)	-	3.2以上	-	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、オサエ、 ナデ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 小片	
128	-	026-08	土師器	壺	B12	灰白色砂 (セクションベルト内 SR4の東側外)	6.8	2.3以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/6	
129	-	026-07	須恵器	壺	B12	灰白色砂 (セクションベルト内 SR4の東側外)	-	1.8以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	不良	灰 5Y6/1	口縁部 小片	
130	14	012-01	弥生土器	壺	C12	SD11・SR4交点	22.0 ~30.0	2.6以上	-	外:口縁部に瘤状突起、孔、刻 み、 ヨコナデ、ハケ(6本/cm) 内:ヨコナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 小片	異時期のため 包含層扱い
131	-	028-07	弥生土器	壺	B14	包含層	-	1.7以上	-	外:口縁部に瘤状突起、 刻み、刺突 内:ナデ	粗	良	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁部 小片	
132	-	021-07	弥生土器	壺	B12	SR4最北 セクションベルト	17.0	1.8以上	-	外:刺突列点文、ナデ、板ナデ 内:ナデ	粗	良	にぶい褐 7.5YR5/3	口縁部 1/8	異時期のため 包含層扱い
133	-	017-12	弥生土器	甕	C13	SR4	-	2.2以上	-	磨滅のため調整不明	粗	良	外:灰5Y5/1 内:灰白 5Y8/2	口縁部 小片	異時期のため 包含層扱い
134	-	021-09	弥生土器	甕	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	3.4以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 密	良	灰黄褐 10YR6/2	小片	異時期のため 包含層扱い
135	-	010-04	弥生土器	甕	B14	SD11	17.4	5.8以上	-	外:ヨコナデ、ハケ、 ナデ、櫛描横線文9本 内:ヨコナデ、ハケ(5本/cm)	粗	良	外:灰白 10YR7/1 内:灰白 7.5YR8/2	口縁部 1/6	異時期のため 包含層扱い
136	-	026-09	弥生土器	甕	A12 A13	暗灰色シルト (SR4東側外)	-	3.2以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 密	良	灰白 2.5Y8/2	口縁部 小片	異時期のため 包含層扱い
137	-	012-02	弥生土器	甕か	C12	SD11・SR4交点	-	3.6以上	6.5	外:ナデ? 内:ナデ?	粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 小片	磨滅大 異時期 のため包含層扱い
138	-	017-01	弥生土器	甕	B12	SR4	-	4.3以上	6.1	外:ミガキ、ナデ 内:ナデ?	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	底部 完形	異時期のため 包含層扱い
139	-	028-06	土師器	甕	B14	包含層	16.2	3.2以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁部 1/8	
140	-	021-04	土師器	甕	B13	SR4の続き 砂層以上	-	3.9以上	-	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	小片	
141	-	021-06	土師器	甕	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	4.6以上	台径 11.8	外:板ナデ、オサエ 内:オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	良	灰黄褐 10YR6/2	台部 1/5	
142	-	021-08	土師器	壺	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	3.8以上	5.0	外:ナデ 内:ナデ	粗	良	赤橙 10R6/6	底部 1/4	風化大
143	-	026-03	土師器	壺	C12	セクションベルト SR4より下層	-	2.8以上	-	外:ナデ、黒斑あり 内:ナデ	やや 粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	底部 小片	
144	-	028-02	陶器	山茶碗	C12	包含層	15.6	3.9以上	-	外:ロクロナデ、自然釉 内:ロクロナデ	やや 密	良	灰白 5Y7/1	口縁部 1/8	尾張産
145	-	026-05	土師器	高杯	C12	セクションベルト SR4より下層	-	5.8以上	-	外:風化で調整不明 内:ケズリ	やや 密	良	橙 5YR6/6	脚上部 のみ	
146	-	026-01	土師器	高杯	C12	セクションベルト SR4より下層	-	4.1以上	-	外:ナデ 内:ナデ、シボリ	やや 密	良	灰黄褐 10YR6/2	脚上部 のみ	
147	-	026-02	土師器	高杯	C12	セクションベルト SR4より下層	-	3.0以上	-	外:ナデ 内:シボリ	密	良	灰白 2.5Y7/1	脚上部 のみ	
148	-	021-01	土師器	高杯	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	4.4以上	-	外:ナデ、オサエ、ハケ後ナデ 内:シボリ	粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	脚部 上半	
149	-	021-02	土師器	高杯	B13	SR4の続き 砂層以下	-	2.4以上	台径 12.8	外:ナデ 内:ナデ	やや 密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	脚裾部 1/4	
150	-	029-01	須恵器	杯蓋	A13 B13	SE1	13.6	3.8以上	-	外:ロクロナデ、ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや 密	良	灰N6/	1/5	異時期のため 包含層扱い
151	-	028-03	陶器	山茶碗	C14	包含層	16.2	3.1以上	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ、自然釉	やや 密	良	灰白 5Y7/1	口縁部 1/8	尾張産
152	-	028-08	陶器	山茶碗	B6	包含層	-	4.3以上	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや 粗	良	灰白 7.5YR7/1	口縁部 小片	尾張産
153	-	008-03	陶器	山茶碗	B6	SK19	-	4.3以上	台径 6.0	外:ロクロナデ、高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	やや 密	良	灰白 5Y7/1	小片	山茶碗の小碗タイプ のものか 異時期の ため包含層扱い
154	-	028-04	陶器	山茶碗	B14	包含層	-	3.4以上	台径 8.2	外:ロクロナデ、高台貼付ナデ、 糸切痕、粉殻痕 内:ロクロナデ、重ね焼き痕	やや 粗	良	灰白 7.5Y7/1	底部 1/5	尾張産
155	-	028-01	陶器	山茶碗	B13	包含層	-	2.9以上	台径 7.6	外:ロクロナデ、高台貼付ナデ、 糸切痕、粉殻痕 内:ロクロナデ	粗	良	オリープ灰 2.5GY6/1	底部 1/4	尾張産
156	-	028-05	陶器	天目 茶碗	B6	包含層	-	3.6以上	台径 4.8	外:鉄釉、ロクロケズリ 内:鉄釉	やや 粗	良	胎土:灰白 7.5Y8/1 釉:オリープ黒 5Y3/1	高台 完形	瀬戸美濃産

第6表 出土遺物観察表④

V 自然科学分析

1 分析の目的

蔵田遺跡(第4次)では、SK18・19の土壌分析とSR4・SD4等から出土した木材についての樹種同定を行った。

土壌分析については、SK18・19に人骨や副葬品など墓として利用されていたことを直接的に示す資料はないものの、良好な土器を土器棺としていた可能性があり、土壌の理化学成分を分析(リン・カルシウム分析)して、遺体埋納の有無を検証することとした。

樹種同定については、SR4やSD4といった弥生時代や古墳時代の流路・溝から出土した木製品や自然流木により、蔵田遺跡周辺の古植生に関する情報を得ることを目的として実施した。

なお、この分析事業は平成15年度に実施し、共にバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

(小林)

2 土壌分析

(1) 試料

試料が採取された遺構は、SK18とSK19である。SK18は、長軸方向約2.1m、短軸方向約1.2m、平面プランが不定形を呈する土坑である。遺構検出面から底面までの遺構深度は約0.1m程度である。SK19は、長軸方向約1.4m、短軸方向約0.9m、平面プランが隅丸方形を呈する土坑である。遺構検出面から底面まで約0.1m程度を計る。

試料は、SK18、SK19ともにブロック状の試料として、遺構内(No.1)、遺構南側(No.2)、遺構北側(No.3)から3点(計6点)が採取された。このブロック状に採取された試料の上面、すなわち遺構底面部分について分析必要量を削り取って分析試料とした。いずれの試料も灰オリーブ色を呈した砂壤土(SL:粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)からなる。なお、土色はマンセル表色系に準じた新版標準土色帖^①に、土性は土壌調査ハンドブック^②の野外土性に準じる。

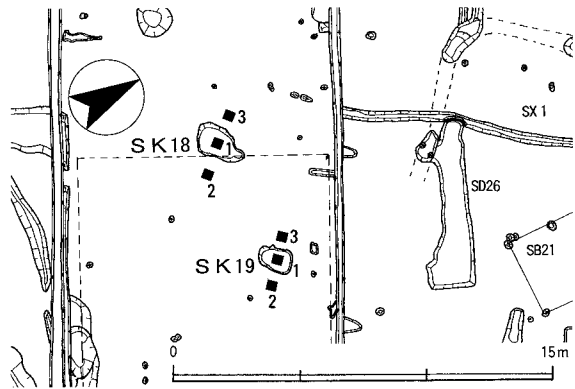
(2) 分析方法

今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸の含量測定を行う。リン酸も骨に多量に含まれ、土壌中に固定されやすい性質を持つ。そのため、遺体が埋葬されると土壌中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。そこで、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定する。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法でそれぞれ測定する^③。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmφの篩を全通させる(微粉砕試料)。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)を求める。



第22図 試料採取位置図(1:300)

また、微粉碎試料0.100~0.500 gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C乾土%) を求める。これに1.724を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

(3) 結果

結果を第7表に示す。SK18では、腐植含量が0.54-1.03%、リン酸含量が1.51-1.86P₂O₅mg/gを示す。試料3は、他の試料よりもリン酸含量がやや高いが、腐植含量も同様な傾向を示す。

SK19では、腐植含量が0.60-0.76%、リン酸含量が1.18-1.33P₂O₅mg/gを示す。腐植含量、リン酸含量とも試料間に有意差がほとんど認められない。

(4) 考察

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量についてはBowen^④、Bolt & Bruggenwert^⑤、天野ほか^⑥、川崎ほか^⑦などの研究例がある。これらの事例から推定されるリン酸の天然賦存量の上限は約3.0P₂O₅mg/g程度である(なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP₂O₅mg/gで統一している)。したがって、これらの値を著しく越える土壌では、外的要因(おそらく人為的影響によるもの)によるリン酸成分の富化が指摘できる。しかし、今回の測定試料では、いずれも上記した天然賦存量の上限を上回る試料がみられない。

一般的に土壌の理化学成分は、自然状態において平衡状態を保とうとするため、均一になる性質がある。しかし、人為的な埋納が行われると、場所によって組成にばらつきが生じることが知られている^⑧。今回の試料でみると、SK18は、試料3で若干リン酸含量が高い値を示すが、同時に腐植含量も傾向がある。つまり、ここでのリン酸含量は、土壌腐植、つまり植物体の影響を受けている可能性がある。一方、SK19では、腐植含量およびリン酸含量ともに試料間のバラツキが小さい。

以上のことから、今回の土壌理化学成分からは、SK18、SK19とも、土坑内部に遺体が埋納されていた痕跡を見いだすことができず、墓坑として利用されていたか検証することができない。ただし、堆積物が砂を多く含み、養分を保持しにくい土質であることを考えると、リン酸成分が固定されず、遺構外や下方などに流亡した可能性もある。

(バリノ・サーヴェイ株式会社 斉藤紀行 金井慎司)

3 木材の樹種同定

(1) 試料

試料は、SR4の続きとされる溝、SD4、SR4とSD4の交点付近、SD4とSD40の交点付近から出土した自然木15点(試料番号1-15)である。また、他に下層流路から出土した自然木1点(試料番号16)もあり、合計点数は16点である。なお、溝堆積物は下層から弥生時代、上層から古墳時代の土器が出土している。

遺構	番号	位置	土性	土色		腐植含量(%)	P ₂ O ₅ (mg/g)
SK18	1	遺構内	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.54	1.52
	2	遺構南側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.77	1.51
	3	遺構北側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	1.03	1.86
SK19	1	遺構内	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.60	1.18
	2	遺構南側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.65	1.32
	3	遺構北側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.76	1.33

注1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

注2)土性:土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。

SL…砂壤土(粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)

第7表 土壌理化学分析結果

(2) 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を第8表に示す。自然木は、針葉樹2種類（モミ属・スギ）と広葉樹7種類（ヤナギ属・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・エノキ属・ヤブツバキ・ツタ属・イボタノキ属）各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)

スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認めら

れる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

試料は径約1.5cmの丸木材。当年性で、年輪は認められない。樹芯部に隋が認められることから、枝材と考えられる。散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して、年輪全体にはほぼ一様に散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸〜厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科イノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は接線方向に疎な3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は2-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状、

番号	地区	遺構	ラベル	樹種
1	B13	SR4のつづき 砂層以上	セクションベルト	ツバキ属
2	C10	SD4	木-9	コナラ属アカガシ亜属
3	B12	SR4・SD4交点		スギ
4	B12	SR4・SD4交点		ツタ属
5	B12	SR4・SD4交点		スダジイ
6	B12	SR4・SD4交点		スギ
7	B12	SR4・SD4交点		スギ
8	B12	SR4・SD4交点		スギ
9		SR4・SD4交点		エノキ属
10	C10	SD4・SD40交点		ヤナギ属
11	C10	SD4・SD40交点		イボタノキ属
12	C10	SD4・SD40交点		ツタ属
13	C10	SD4	木-11	モミ属
14	C10	SD4・SD40交点		コナラ属アカガシ亜属
15	C10	SD4・SD40交点		コナラ属アカガシ亜属
16	D12	SR13	下層流路の埋土No.2	モミ属

第8表 樹種同定結果

小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-50細胞高で、鞘細胞が認められる。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状となる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高で、時に上下に連結する。放射組織には結晶細胞が認められる。

・ツタ属 (*Parthenocissus*) ブドウ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激あるいは緩やかに管径を減じる。孔圏内でも小径の道管が介在することがある。孔圏外の小道管は、単独または2-4個が放射方向または塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を減ずる。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状となる。放射組織は、同性、4-8細胞幅、100細胞高以上。

・イボタノキ属 (*Ligustrum*) モクセイ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

(4) 考察

今回の溝堆積物から出土した自然木は、針葉樹のモミ属・スギ属、広葉樹のヤナギ属・アカガシ亜属・スダジイ・エノキ属・ヤブツバキ・イボタノキ属、ツル性木本のツタ属の9種類に同定された。この中ではスギが4点・アカガシ亜属3点と比較的多かった。

これらの樹種のうち、アカガシ亜属・スダジイ・ヤブツバキは暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要構成種もしくは構成種である。エノキ属・ヤナギ属は河畔林を構成する要素でもあり、ツタ属は林内から林縁に生育する種類である。また、モミ属には現在日本にモミ・ウラジロモミ・アオモリトドマツ・シラベなどの種類が存在するが、モミ以外の種類は冷温帯上部から亜寒帯に分布している。したが

って、ここでのモミ属は、アカガシ亜属など照葉樹を伴うことから、暖温帯上部から温帯下部にかけて分布するモミに比定される可能性が高い。モミは耐陰性が強い谷筋など比較的湿気の多い場所に生育する傾向がある⁹⁾。今回最も多産したスギは、比較的水分条件の良い場所に生育する。

以上の溝堆積物出土木材の種類構成、および本遺跡の立地環境から、当時の遺跡周辺が暖温帯性の気候下に属していたことが推定される。常緑広葉樹やスギなどが周囲の山地や低地に分布していたことが推定されるが、どのような林分を形成していたかは特定できない。今後、花粉化石や種実遺体などの産状を調査し、総合的に古植生について検討する必要がある。

一方、下層流路から出土した自然木は、針葉樹のモミ属に同定された。中間温帯林を構成する温帯性針葉樹であるモミに比定される可能性がある。

以上、溝堆積物および下層流路から出土した木材遺体の樹種同定を行った結果、溝堆積物が形成された当時は暖温帯の植生が成立していたことが推定された。また、モミ属・スギといった温帯性針葉樹の存在は、当時の植生を考える上で興味深い結果である。上記したように温帯性針葉樹の種類は暖温帯上部から冷温帯下部にかけて分布する種類であるが、当時は照葉樹の種類と混生していた可能性もある。今後、花粉・種実などの植物化石分析による検証が必要である。

(パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦)

[註]

- ①農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1967年)。
- ②ペドロジスト懇談会編『土壌調査ハンドブック』(博友社、1984年)。
- ③土壌養分測定法委員会編『土壌養分分析法』(養賢堂、1981年)。
- ④Bowen, H. J. M. 『Environmental Chemistry of Elements』(1979年)。[浅見輝男・茅野充男(訳)『環境無機化学 一元素の循環と生化学-』(博友社、1983年)。]
- ⑤Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. 『SOIL CHEMISTRY』(1976年)。[岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳『土壌の化学』(学会出版センター、1980年)。]
- ⑥天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」(農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』、1991年)。
- ⑦川崎 弘・吉田 滯・井上恒久「九州地域の土壌型別蓄積リン

の形態別計量」(農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』1991年)。

⑧例えば、小山陽造「東北地方の脂肪酸分析結果」(『考古学ジャーナル』386、1995年)や中根秀二「1号方形周溝墓の自然科学的分析」(都立学校遺跡調査会『田園調布南2 都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書』1992年)など。

⑨矢頭 献一『図説樹木学 一針葉樹編一』(朝倉書店、1964年)。

VI 調査のまとめと考察

1 確認された遺構

蔵田遺跡(第4次)は、過去の調査区の中の部分の調査であり、面積も非常に狭い調査であった。しかし、過去の調査結果の再確認という意味では非常に大きな意義を持つ調査であった。第1～3次調査の報告書(以下「第1～3次報告書」と呼称)^①以降で新たに判明したことを時代順に記す。

下層遺構 過去の調査では、遺物の出土が報告されており、灰褐色粗砂層が縄文時代晩期頃の形成と想定されていた。

今回の調査では調査区南東部のC・D12～13区の下層で、SR12・13の2本の自然流路を確認した。このうちSR13は埋土の状況からおそらく灰褐色粗砂層に相当するものだろうと判断できた。

また、調査区中央部の下層確認坑では、新たに3本の下層流路(SR14・15・16)の存在も明らかになった。

弥生時代 過去の調査で検出されていたSD4やSR1の続きを確認した。SD4は、想定通りに過去のC地区からD地区まで連結することを確認した。SR1は今回の調査区内で西に曲がることが確認され、弧を描くような平面形態であることが判明した。

また、今回は3基の土坑を確認し、墓である可能性を考慮して土壌分析を行ったが、積極的に墓であると言える結果を得ることはできなかった(第V章参照)。

なお、SD3の続きは、今回の調査区では検出されなかった。

古墳時代 過去の調査で検出されていたSR4やSD11の続きを確認した。なお、SD10(SD4の上層)については確認されなかった。

飛鳥・奈良時代 今回の調査では確認されなかった。遺物もまったくないため、この時期の遺構は第3次調査のE地区のみでしか見られないのだろう。

鎌倉時代 今回の調査では確認されなかった。

ただし、遺物には山茶碗の出土が見られる。削平等のことも考慮すると、過去の調査で見られるように蔵田遺跡全体に遺構の広がりがあったことが考えられる。

2 弥生時代集落の様相

蔵田遺跡における弥生時代集落の様相については、第1～3次報告書においてもまとめられている。今回の調査区内でも弥生時代の溝に加えて土坑も検出され、周辺には多くの弥生時代遺構もある。ここでは弥生時代中期について、今回の調査成果を加え、過去の調査の遺構についても再検討したい。

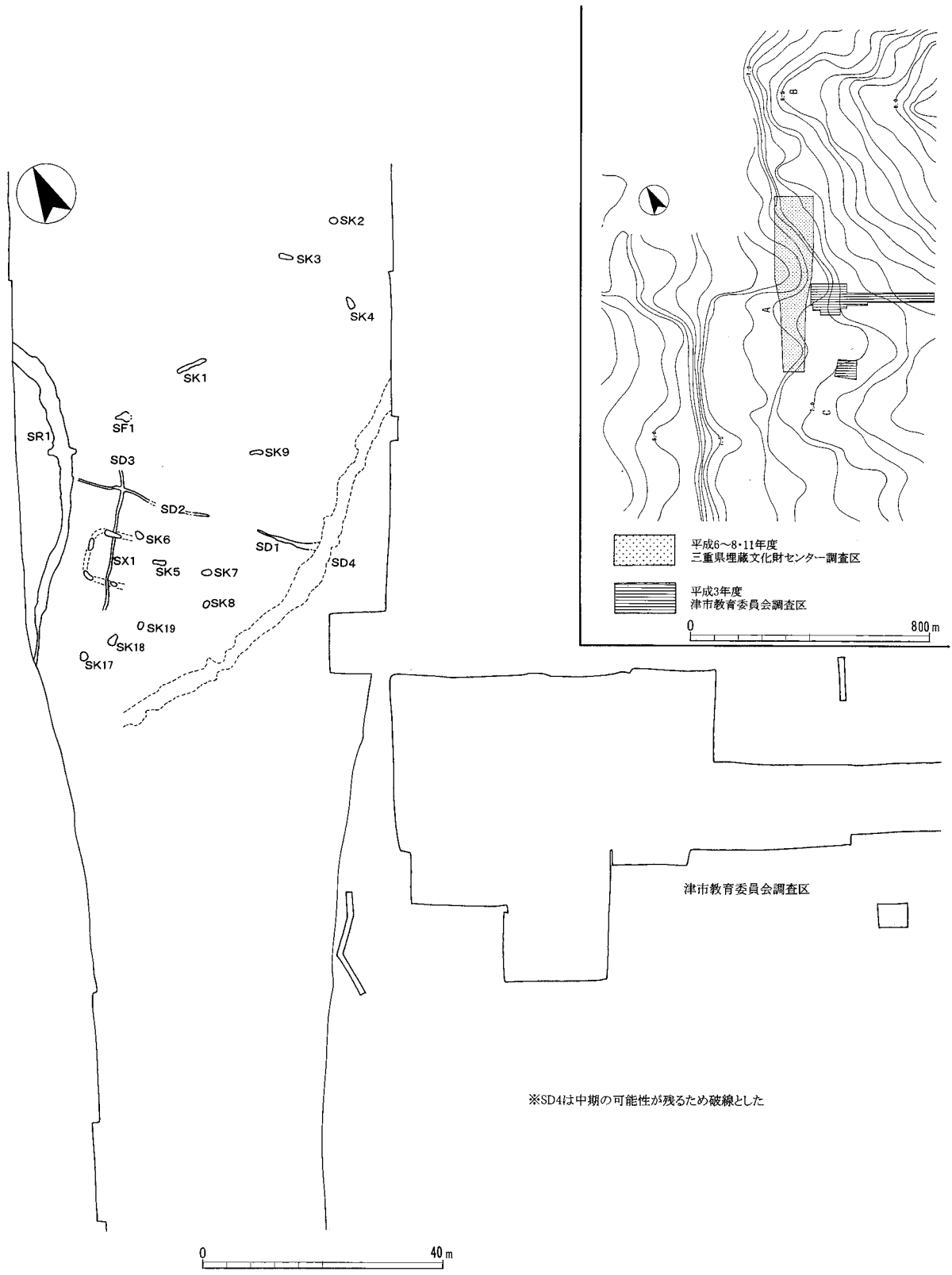
土坑 今回の調査区では、3基の弥生時代中期の土坑を検出した。比較的良好な土器が出土したため、現地調査時には墓である可能性を考えていた。しかし、土壌分析の結果からは、積極的に墓とは言い難いという結果が出ている(第V章参照)。

このような土坑については、「完形に近い土器の出土から土壇墓との推定がなされることがあるが、弥生時代中期には土器を埋葬施設に入れることはまれである。したがって、逆に完形に近い土器が数個体出土するような場合は墓との認定を慎重に行うべきであろう。」との指摘がある^②。これを踏まえると、蔵田遺跡のSK18・19における土壌分析の結果は納得できるものとなる。

したがって、蔵田遺跡SK18・19は墓でない可能性が高いだろう。SK18・19の周辺にはSK5～8が近接した場所にあるが、規模や時期の点でSK18・19に類似しているため、同様に墓ではない可能性が高いだろう。

溝 蔵田遺跡では、弥生時代の比較的大きな溝として、今回の調査区でも検出されたSD4とSR1がある。SD4については第III章でも述べたように時期決定に不安を残すが、SR1は中期の溝である。

SR1は等高線に沿った形で、弧を描くような平面形態をしている。つまり、地形に合わせて作られ



第23図 弥生時代中期の葦田遺跡(1:1,000)・葦田遺跡周辺微地形図(1:20,000)〔註①文献より〕

た溝であることがわかる。このSR1よりも西側は地形的に高い部分であり、集落の中心は調査区より西側に存在することが考えられるだろう。

SD1・2については、第1～3次報告書中では居住域と墓域とを区画する溝であることが指摘されているが、前述の土坑や後述の建物の検討結果から、この溝の機能については居住域と墓域を区画するものと即断することはできないだろう。

小結 蔵田遺跡では、弥生時代中期の遺構は第2次調査C地区や第4次調査に集中する。つまり、SR1の周辺という空間に遺構が存在すると言えるだろう。また、SR1のありかたや地形的なことを考慮すると、今回の調査区の西側(現在の西郊中学校付近)に集落の中心があったことが推測できよう。

この蔵田遺跡がある安濃川下流域では、弥生時代中期には拠点集落と見られる納所遺跡がある。これを中心に蔵田遺跡や、その南方の安濃川沿いには

替田遺跡・武ノ坪遺跡がある。また、やや北方には松ノ木遺跡(方形周溝墓・墓域)、森山東遺跡(水田生産域)といった遺跡があり、拠点集落と衛星的集落といった構図、また隣の集落とは途中の自然河道を境界にするといった状況までも見ることができる。この状況がわかる例は三重県内では少なく、貴重な例である。安濃川下流域ではその後、中期後葉には大量の竪穴住居を検出した長遺跡、山籠遺跡が見られてくるが、これらは後期には納所遺跡の衰退に合わせて、一気に廃絶する。蔵田遺跡はそのような安濃川下流域における花開いた弥生中期文化を彩った一員であったと評価できよう。

(小林)

〔註〕

- ①三重県埋蔵文化財センター『蔵田遺跡発掘調査報告』(1999年)。
- ②三重県埋蔵文化財センター「替田遺跡における弥生集落の様相」(『替田遺跡(第5次～第8次)発掘調査報告』、2007年)。

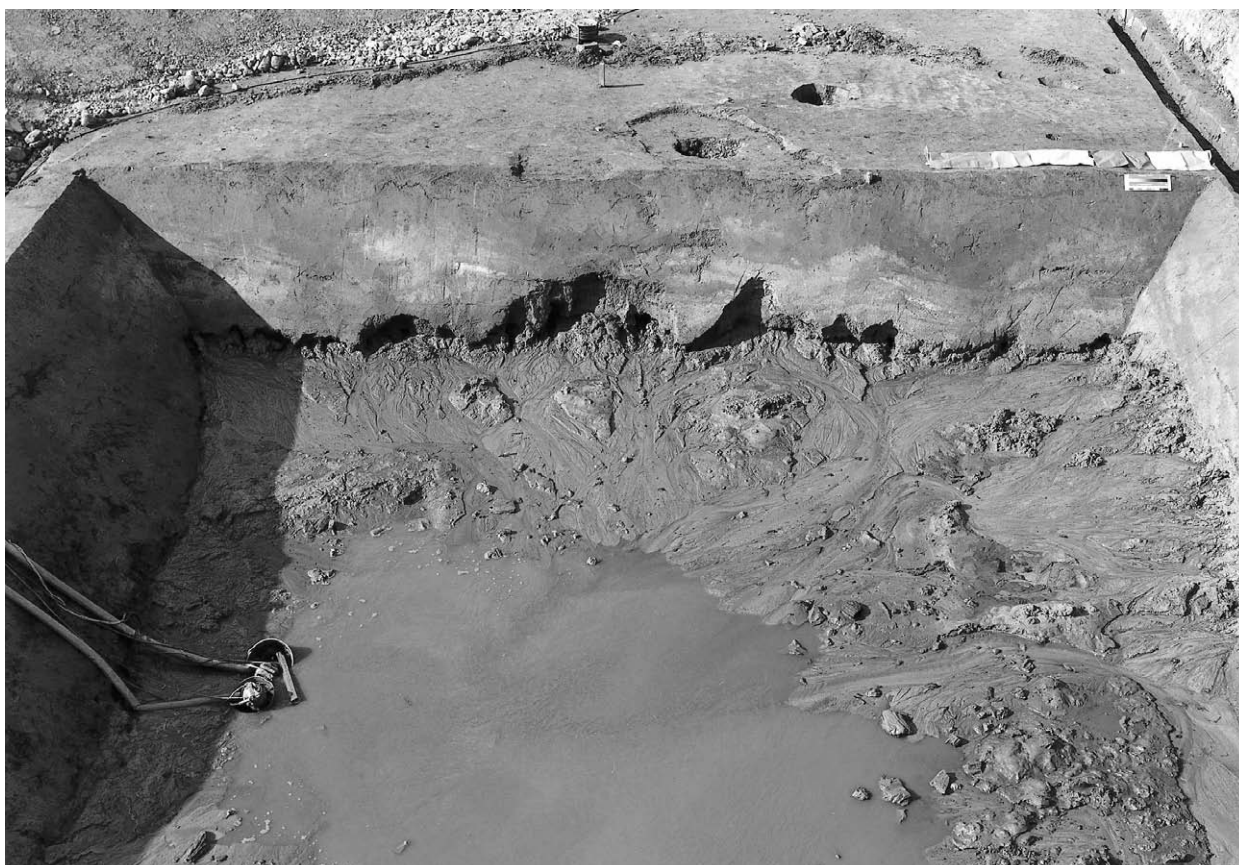
写真図版



調査区全景(西から)



S R 14 [下層確認坑北壁土層] (南東から)



下層確認坑西壁土層(東から)



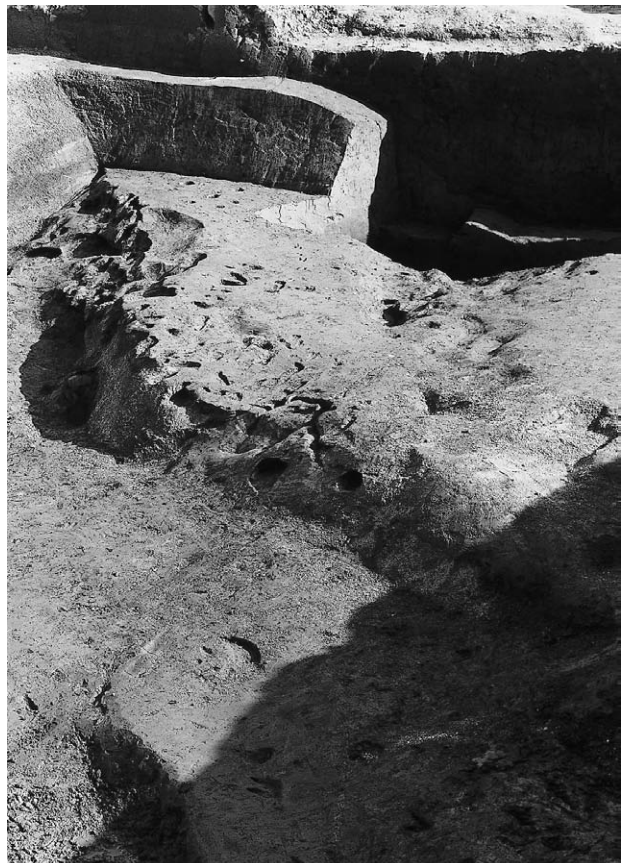
S R12・13、S D41全景(西から)



足跡検出状況(西から)



足跡検出状況【拡大】(西から)



足跡完掘状況(西から)



S K17遺物出土状況(東から)



S K18遺物出土状況(東から)



S K19遺物出土状況(東から)



S K 18完掘状況(北から)



S K 19完掘状況(東から)



S D4土層断面(南から)



S D4遺物出土状況(南から)



S D40(西から)



S Z11(南から)



S R1(北から)

写真図版 8



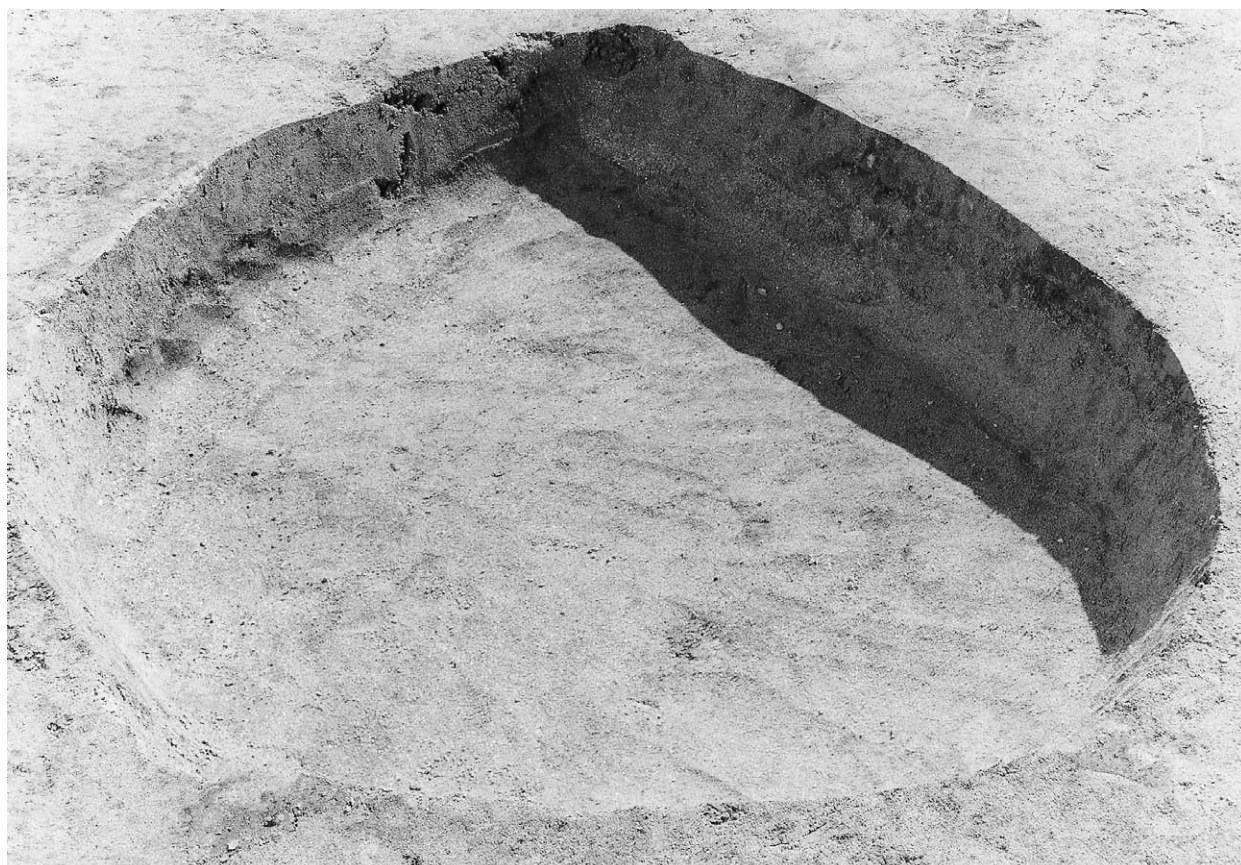
S D11・S R4・S D4検出状況(東から)



S D11・S R4・S D4完掘状況(西から)



S K20(東から)



S K21(西から)

写真图版10



68



122



112



85



108



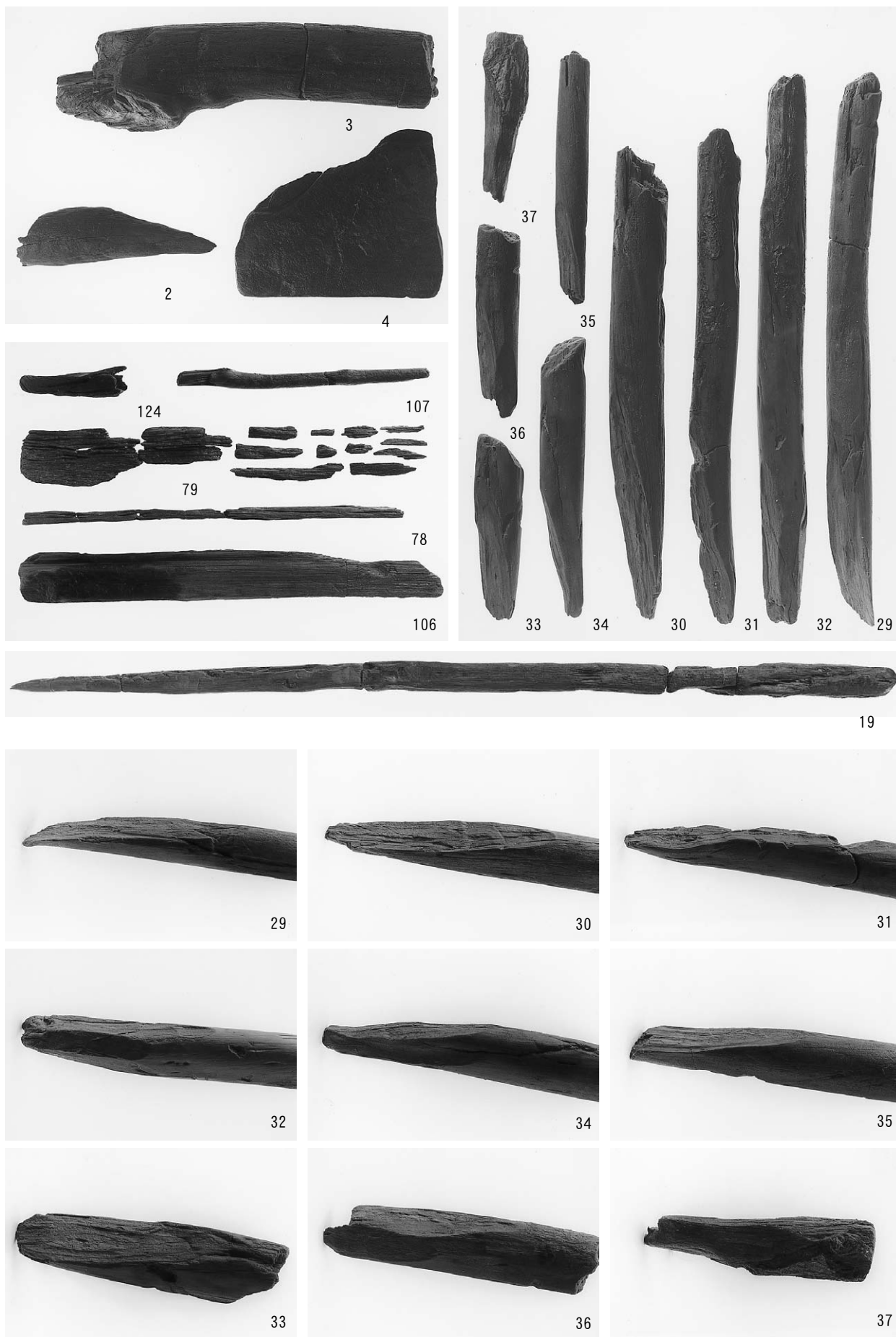
130



18

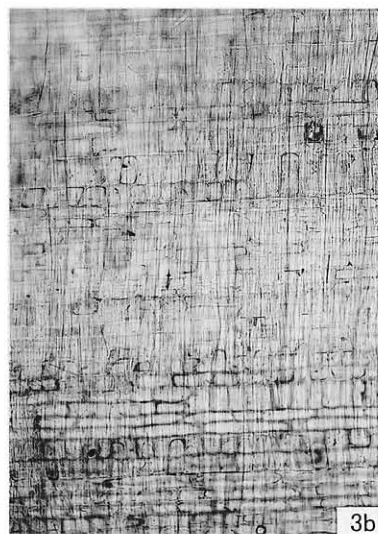
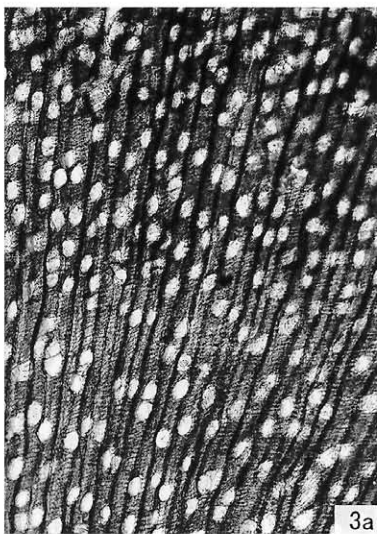
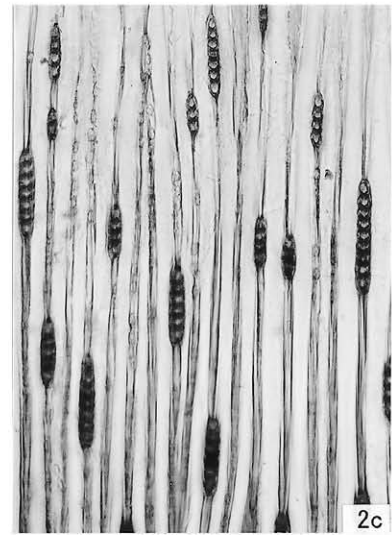
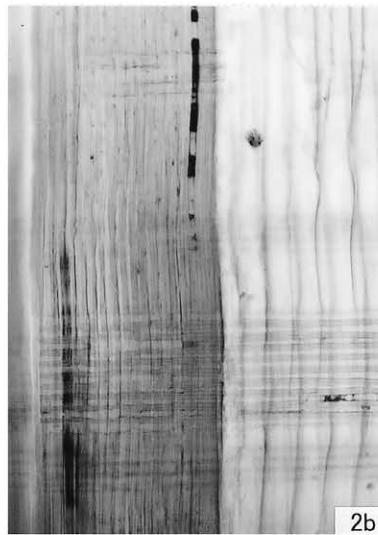
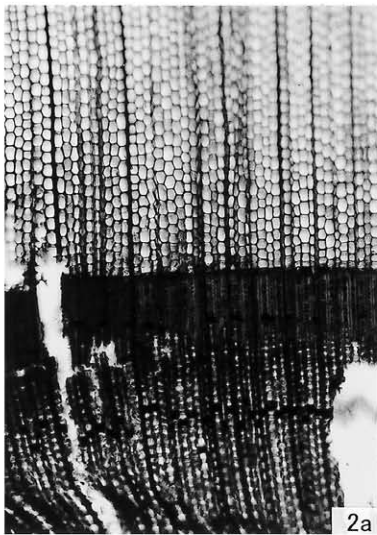
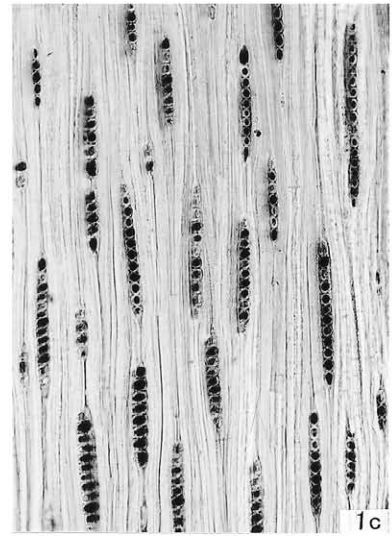
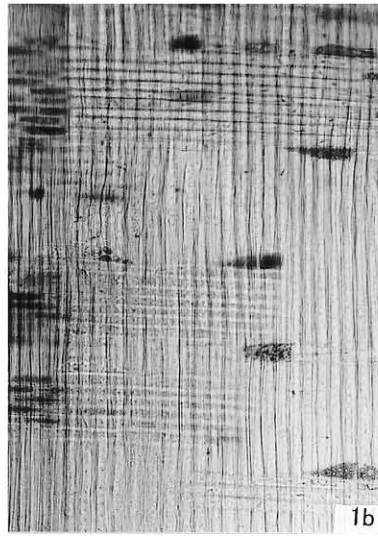
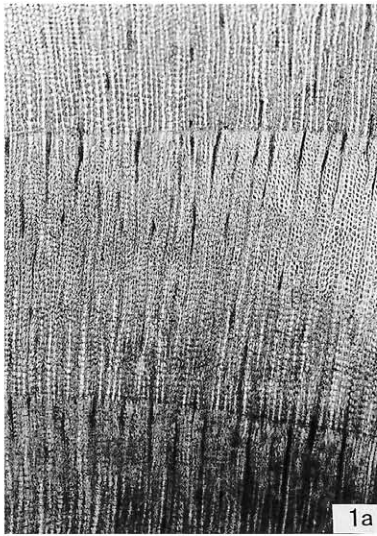


1



写真図版 12

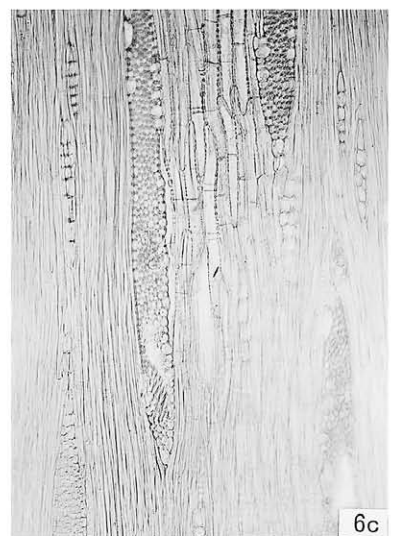
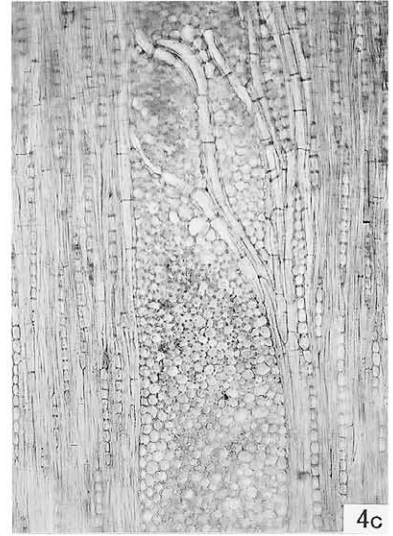
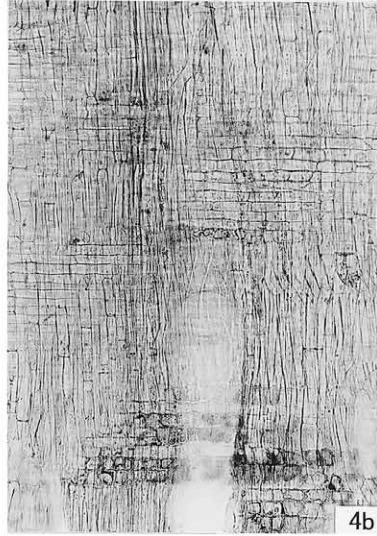
樹種同定木材(1)



1. モミ属(試料番号13)
 2. スギ(試料番号8)
 3. ヤナギ属(試料番号10)
- a:木口, b:柱目, c:板目

200 μ m.a
200 μ m.b,c

樹種同定木材(2)

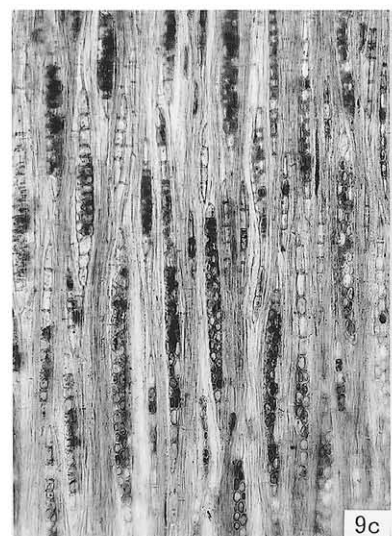
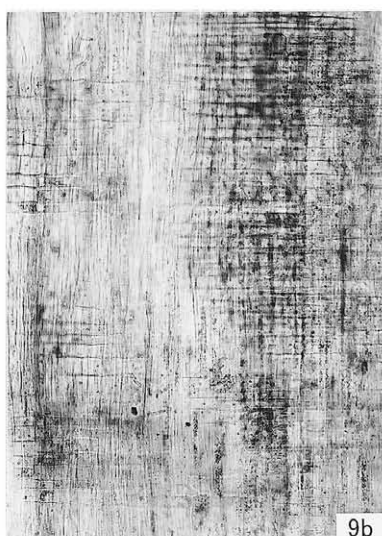
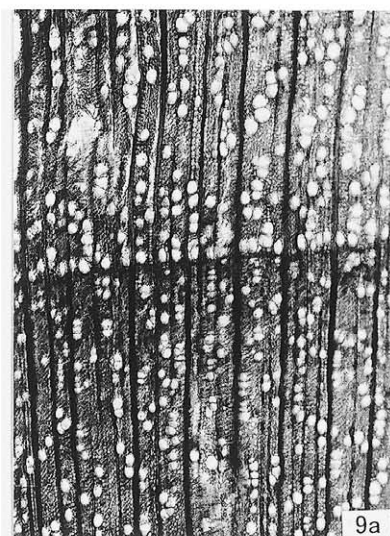
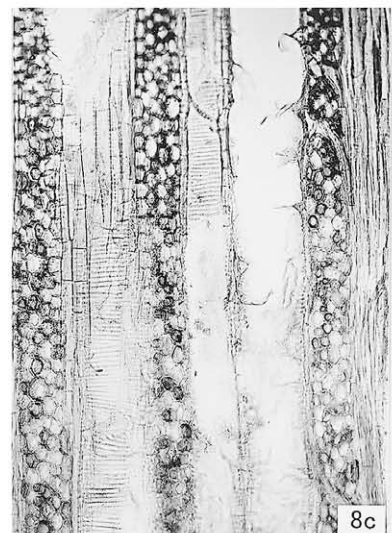
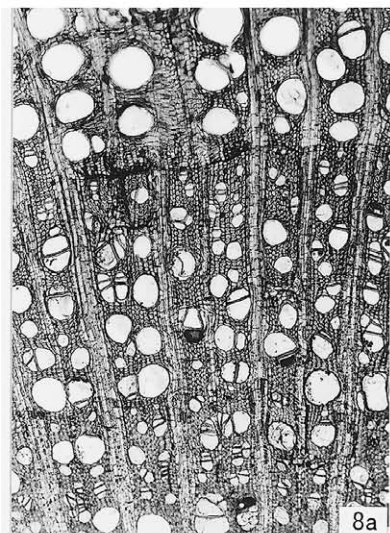


- 4. コナラ属アカガシ亜属(試料番号14)
 - 5. スダジイ(試料番号5)
 - 6. エノキ属(試料番号9)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

写真図版14

樹種同定木材(3)



7. ヤブツバキ(試料番号1)
 8. ツタ属(試料番号4)
 9. イボタノキ属(試料番号11)
 a:木口, b:柁目, c:板目

200 μ m:a
 200 μ m:b,c

報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ(じっこうく)けんせつじぎょうにともなう ぞうたいせき(だいよんじ)はくつちょうさほうこく							
書名	一般国道 23 号中勢道路(10 工区)建設事業に伴う 蔵田遺跡(第 4 次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-25							
編著者名	小林俊之 パリノ・サーヴェイ株式会社 斉藤紀行 金井慎司 高橋敦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川 503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2008年 2月 29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぞうたいせき 蔵田遺跡	みえけん 三重県 つしのうそちよう 津市納所町 あざぞうた 字蔵田	24201	a757	34 度 43 分 31 秒	136 度 28 分 49 秒	19991021 ～ 19991213	630 m ²	一般国道 23 号中 勢道路(10 工区) 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
蔵田遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代		土坑 溝 流路 等		弥生土器 土師器 須恵器 陶器 木製品 等		溝、流路から木 製品あり。
要 約	<p>蔵田遺跡は、これまでの調査によって弥生時代から鎌倉時代の集落跡と判明している。特に、古墳時代の自然流路や溝、それに伴う護岸施設、杭列は注目される。また、平安・鎌倉時代の掘立柱建物跡は条里地割と一致し、当地の土地制度を考える上での貴重な資料である。</p> <p>今回の調査地点は、過去の調査の C 地区と D 地区に挟まれた市道部分である。そこでは、過去の調査で検出された溝や自然流路の続きが検出された。弥生時代の土坑も 3 基確認され、三重県の最も著名な弥生時代遺跡のひとつ納所遺跡の近隣を考える上で、重要な資料となった。なお、今回の調査では、平安・鎌倉時代の遺構は検出されなかった。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告115-25

一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う

蔵田遺跡（第4次）発掘調査報告

2008（平成20）年2月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷（有）山文印刷
